

大 館 市

# 玉 林 寺 跡

発掘調査報告書

1986・1

大 館 市 教 育 委 員 会

大 館 市

# 玉 林 寺 跡

発掘調査報告書

1986・1

大館市教育委員会

## 序

このたび市の東部に位置する鳳凰山麓に林道を開設するにあたり、現在、市内幸町に存在する曹洞宗鳳凰山玉林寺が、当初建立されたとの伝承が残っている遺跡の一部を発掘調査しましたが、本書はその調査結果をまとめたものです。

本書が専門的な分野においての活用とともに、埋蔵文化財保護思想の高揚に役立てば幸いに思います。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました調査員並びに関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

昭和60年12月

大館市教育委員会

教育長 月 居 泰

## 例 言

- 1 本報告書は、秋田県大館市茂内大字鬼ヶ台3番地に所在する玉林寺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本報告書は、林道「大寺の沢線」開設工事に係る発掘調査報告書である。したがって玉林寺跡内の計画林道幅員だけの発掘調査である。
- 3 本調査は、工事を計画した大館市農林課の依頼によって、昭和60年4月22日から同年5月11日までの期間に実施したものである。
- 4 本報告書の執筆・編集はすべて板橋範芳が行った。
- 5 遺物の整理・実測・トレース・写真撮影・採拓は板橋が行い、市史編さん係臨時職員山本美子の補助を得た。
- 6 本報告書に図示した挿図には各々スケールを表示した。なおPL図版は任意である。
- 7 本報告書作成にあたり、下記の方々から御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表する。  
佐々木達夫（金沢大学助教授） 富樫泰時（秋田県教育庁文化課） 桜田隆（秋田県埋蔵文化財センター） 秋元信夫（鹿角市教育委員会 社会教育課） 藤井安正（鹿角市教育委員会埋蔵文化財調査員） 田村栄（秋田県 大館少年自然の家）

## 目 次

I	遺跡の位置と環境	1
II	遺跡について	2
III	発掘調査の経過	4
IV	検出遺構と出土遺物	8
1	石列遺構	8
○遺 構		9
○遺 物		10
2	土壇と方形小ピット	10
○第1号土壇		10
○方形小ピットと出土の仏像		10
○仏 像		13
○第2号土壇		13
○第3号土壇		14
3	組石土壇と出土の埴	16
○組石土壇		16
○溝状ピット中から出土の埴		18
4	竪穴住居跡と出土遺物	19
○竪穴住居跡		19
○出土遺物		19
○土 器		21
○石 器		23
5	その他の出土遺物	27
○土 器		27
○石 器		27
○石 皿		27
○陶 丸		27
○寛永通寶		27
V	玉林寺跡と鬼ヶ城について	28
VI	むすび	31

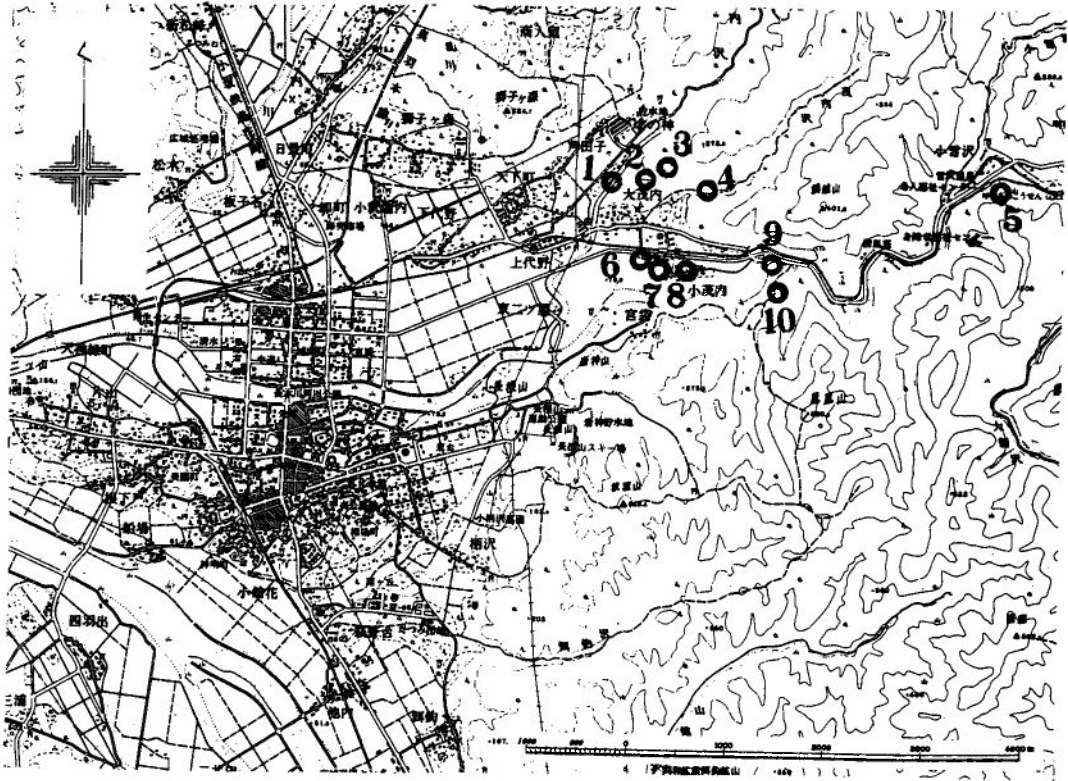
## 挿 図 目 次

第1図	玉林寺跡と周辺の遺跡……………	1
第2図	玉林寺跡付近の地形……………	3
第3図	玉林寺跡発掘調査区周辺地形図…	5
第4図	玉林寺跡発掘調査区全体図…………	6
第5図	石列遺構実測図……………	9
第6図	石列遺構出土遺物……………	8
第7図	第1号土壌と仏像出土の方形 小ピット……………	11
第8図	方形小ピット内出土の仏像…………	12
第9図	第2号土壌……………	14
第10図	第3号土壌……………	15
第11図	第3号土壌の立石……………	16
第12図	組石およびその下位の土壌…………	17
第13図	組石土壌出土の埴……………	18
第14図	竪穴住居跡と覆土層序……………	20
第15図	竪穴住居跡内の石組炉……………	21
第16図	竪穴住居跡内出土土器……………	22
第17図	竪穴住居跡内出土石器……………	24
第18図	玉林寺跡覆土からの出土土器…………	25
第19図	玉林寺跡覆土からの出土石器…………	26
第20図	竪穴住居跡外北部出土の石皿…………	27
第21図	C区「さかい堀」出土の陶丸…………	27

## 図 版 目 次

PL 1	鳳凰山・玉林寺跡遠景……………	32
PL 2	鬼ヶ城と玉林寺跡近景……………	32
PL 3	発掘調査前の様子……………	33
1	杉を伐採した後の調査現場……………	33
2	発掘調査区の杉枝・下草の 整理作業……………	33
3	発掘調査準備の整った現場……………	33
PL 4	C調査区検出の石列遺構……………	34
PL 5	C調査区検出の石列遺構……………	34
PL 6	石列遺構の細部……………	35
PL 7	石列をとり除いた下位の状況……………	36
PL 8	A調査区北東隅検出の第1号 土壌……………	36

PL 9	A調査区第1号土壌の完掘状況……………	37
PL 10	A調査区第1号土壌の北東に 検出された方形小ピットとピ ット内の仏像出土状況……………	37
PL 11	B調査区検出の第3号土壌と 立石……………	38
PL 12	第3号土壌と立石埋設状況……………	38
PL 13	B調査区全体写真と出土の石皿…………	39
PL 14	B調査区北東隅の組石遺構……………	39
PL 15	B調査区組石遺構下の溝状ピ ットと組石土壌……………	40
PL 16	B調査区組石遺構下の組石土壌…………	40
PL 17	B調査区組石下の溝状ピット 内出土の埴……………	41
1	溝状ピット内の埴出土状況……………	41
2	溝状ピット内の埴出土状況……………	41
3	溝状ピット内の埴出土状況……………	41
PL 18	竪穴住居跡全体写真……………	42
PL 19	竪穴住居跡全体写真……………	42
PL 20	A調査区側の竪穴住居跡とA・ B調査区間セクションベルト……………	43
PL 21	竪穴住居跡内の土器出土状況……………	43
PL 22	竪穴住居跡内南東部の遺物出 土状況……………	44
1	竪穴住居跡内の土器と炭化 材の出土状況……………	44
2	竪穴住居跡内の土器と炭化 材の出土状況……………	44
3	竪穴住居跡内の土器・台石 出土状況……………	44
PL 23	組石炉と石皿・磨石・石棒・ 粗製土器出土状況……………	45
PL 24	組石炉の縁石をとり除いた状況……………	45
PL 25	竪穴住居跡内出土土器……………	46
PL 26	竪穴住居跡内出土石器と第3 号土壌立石(7)……………	47
PL 27	玉林寺跡覆土からの出土土器……………	48
PL 28	玉林寺跡覆土からの出土石器……………	49
PL 29	玉林寺跡出土の歴史時代遺物……………	50
PL 30	鬼ヶ城の主な遺構……………	51



第1図 玉林寺跡と周辺の遺跡

## I 遺跡の位置と環境 (第1図)

遺跡は、大館市茂内大字鬼ヶ台に所在し、長木川が大館盆地に貫入する地点の南側、鳳凰山（標高520.4m）から北に向って派生した前山（名称無し）の、西側山腹にわずかに開けた平坦面に位置する（PL1）。大館市の中心街から北東約18km、大館市長木地区の大川目沢を源とする長木川は、山間の幾多の沢水を集めながら「秋田杉」産地として有名な長木沢国有林内を南流、大館市茂内屋敷地区で流路を西にかえ、長木川自身が浸蝕形成した長木川狭谷地の雪沢地区を西流、遺跡の北側で大館盆地東端の茂内地区平野部に貫入し、蛇行しながら大館市街地を南北に分断して西流、市街地の西約4kmの大館市下川沿地区で、秋田県北部を西流して日本海に注ぐ米代川に合流する。

長木川狭谷地は川岸まで山稜がせまり、茂内屋敷付近にわずかに開けた段丘平坦面を形成するほかは、山稜を長木川に向って浸蝕下刻した沢と残った山稜鞍部が凹凸地形を形成していて、人々の生活には不向きな地帯となっている。事実、縄文時代以降の生活遺跡の分布状況を見ても、茂内屋敷付近の開けた段丘台地上と、大館盆地内東端の茂内付近の平野部台地上（後述）の二地

域を除いては、まったくの空白地帯になっていて、現在、長木川狭谷地に点在する集落も、近世になってからの開発、および長木沢での「秋田杉」にかかわる林業にたずさわる、半農半林業集落として発生したと考えられる。

遺跡の位置する地点は、長木川を挟んで、北に鍋越山（標高401.8m）の山裾が、南に鳳凰山の山裾が接膝し、東の長木川狭谷地と西の大館盆地平野部を閉じる自然の関門地形を形成している（PL2）、事実、近世史料によると茂内村は古来「一ノ関村」と呼ばれていた（後述）。この茂内地区（現、大茂内・小茂内地区）の遺跡分布状況をみると第1図に表記したようになっている。

茂内地区は、大茂内集落北側の大茂内沢、茂内沢の形成した扇状地上にあり、大茂内集落を扇頂部にほぼ南西方向に傾斜していて、その最南端すなわち最下位面を長木川が西流している。No1は大茂内遺跡（『秋田県遺跡地図』1976、秋田県教育委員会、では「秋田8-20、県登番116」以下同様）で縄文時代晩期の遺物包含地、No2は諏訪台B遺跡（「秋田8-21、県登番1034」）で須恵器片、石器が確認された遺物散布地、No3は諏訪台A遺跡（「秋田8-22、県登番1033」）で縄文時代中期の円筒上層A・B式土器が確認された遺物包含地、No4は小茂内沢遺跡（「秋田8-23、県登番1032」）で縄文土器片、石器が確認された遺物散布地、No5は小雪沢遺跡（「秋田8-24、県登番1031」）で縄文時代晩期の遺物散布地、No6が塚下B遺跡（「秋田8-25、県登番1036」）で縄文時代後期の遺物散布地、No7が塚下A遺跡（「秋田8-26、県登番1035」）で縄文時代後期の遺物散布地、No8が茂内遺跡（「秋田8-27、県登番117」）で縄文時代前期の円筒下層A・B式土器が確認された遺物包含地となっていて、以上が『秋田県遺跡地図』に記載されている遺跡である。これらのうち発掘調査が行われたのは、塚下A・B遺跡で、大館十和田湖線バイパス工事前の発掘調査が行われ、縄文時代後期の集石遺構と大量の土器、石器、土偶、各種土製品および石製品、古代末（12世紀以降）の9戸の竪穴住居跡からなる集落跡が検出された（秋田県文化財調査報告第61集『塚ノ下遺跡発掘調査報告書』1979.3、秋田県教育委員会）。

第1図No10が今次調査した「玉林寺跡」であり、No9が玉林寺跡発掘調査の事前現地踏査で確認した「鬼ヶ城」である（後述）。

## II 遺跡について（第2図）

玉林寺跡は、鳳凰山の北側に派生した前山の西側山腹、標高124~126m、東西約50m、南北約100mの、東から西へ緩傾斜するわずかに開けた平坦面に所在する。遺跡の北方約400mで大館盆地に貫入した長木川は、遺跡を含む鬼ヶ台の丘陵台地西縁に沿ってほぼ直角に南へ折れて南流し





第2図 玉林寺跡付近の地形

たのち、大きく蛇行しながら岩神山北側を巻いて、長根山台地から大館市街地の所在する台地の北縁に沿って西流する。遺跡はその西側直下を南流する長木川から比高約44mあり、西縁は急峻な崖になっている。

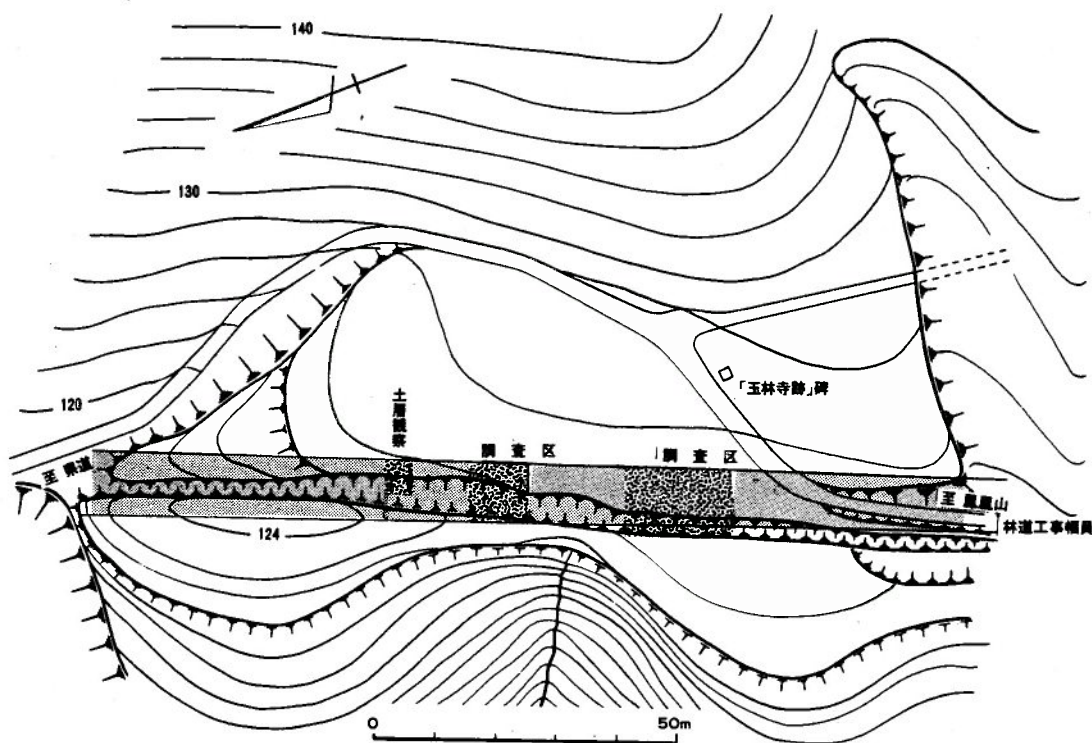
現在は、鬼ヶ台の北縁を主要地方道大館十和田湖線が通り、また同和小坂鉄道も大館～小坂間に通っていて交通の便は良くなったが、かつては、大館中心部から長根山台地、岩神山北麓、宮袋を経て、遺跡付近を通り、鬼ヶ台の北端から長木川を渡って長木川北岸沿いに通る細い旧道が唯一の交通路であった。これは玉林寺や鬼ヶ城が存在した時代も同様であったと考えられる。

玉林寺跡へは鬼ヶ城の東側、大館十和田湖線からの小茂内牧野組合作業道(通称鳳凰山登山道)を入り、鬼ヶ城南側の郭の東縁を通って前山西側の中腹に至る。本跡のある平坦部では、道路はもっとも東側に大きく曲折し、平坦部ほぼ中央で南西に折れて、平坦部を横断して鳳凰山に至る。本跡のある平坦部は西側中央部がくびれる「B」字状で、東西幅のもっとも広いところで50m、南北のもっとも長いところで100mを測る、平坦部の東側3分の2は小茂内集落共有地、西側3分の1は民有地で、大正の初めごろに共有地と民有地の境界に「さかい堀」を設け(小茂内集落の石垣忠一さん-78才-が幼いころに道路であったところを掘ったことを記憶している)、それは現在も明瞭に残っている(PL3)。今次調査は、この「さかい堀」部分を中心に林道を通すことになったために実施されたものである。

本地には、現在大館市内に所在する「玉林寺」があったという所伝は伝えられているが、それに関する史資料文献等は多くない。一方、「鬼ヶ城」についても云い伝えは幾種があるが、この城館遺跡が発見確認されるまで、その比定地には鳳凰山、鍋越山等があつて確定できないでいた。なお、玉林寺と鬼ヶ城については後述する。

### Ⅲ 発掘調査の経過

玉林寺跡発掘調査は、山村林業構造改善事業の林道「大寺の沢線」<sup>おおてら さわせん</sup>開設に伴い実施したものである。昭和59年、大館市農林課は翌60年度の事業計画を立て、その中の一つに林道大寺の沢線の開設工事を策定した。それまで小茂内牧野組合作業道(一般には鳳凰山登山道として知られる)であった幅員の狭い軟弱な路盤の道路を、全面的に拡幅し曲折部を直線化した林道を新設しようとするものであった。農林課では、林道開設計画路線に、伝「玉林寺跡」が存在することから、埋蔵文化財保護上の問題を大館市教育委員会社会教育課に協議した。社会教育課ではこれを受けて文化財保護の立場から林道工事施工工法等の諸事について農林課と協議をもったが、盛土、迂回等の方法が地形上の制約から実施不能と判断して、林道施設工事に先立つ事前発掘調査を実施することを決定、社会教育課は昭和60年度予算に「玉林寺跡発掘調査費」を計上することを決め



第3図 玉林寺跡発掘調査区周辺地形図

るとともに、大館市企画室市史編さん係、板橋範芳に発掘調査担当者を依頼した。板橋は農林課、社会教育課と図上および現地での協議調査を行い、改めて当該地の現状保護の不可能なことを確認した上で、調査地の選定、調査方法の計画を立て社会教育課と協議の上、発掘調査経費、期間等の細目を決定、社会教育課はこれに基づいて、大館市議会に昭和60年度「玉林寺跡発掘調査」事業を計り、議決を受けた。

社会教育課では発掘作業員を地元の小茂内集落から募集するとともに、発掘調査対象地、調査予定期間を決め、次のような要項で発掘調査を実施することとなった。

- 1 遺跡名 玉林寺跡
- 2 所在地 大館市茂内大字鬼ヶ台3番地ほか
- 3 調査期間 昭和60年4月22日～同年5月11日
- 4 発掘調査面積 350㎡
- 5 調査主体者 大館市教育委員会 教育長 月居 泰
- 6 調査担当者 板橋範芳(大館市企画室 市史編さん係)
- 7 調査事務局 大館市教育委員会社会教育課  
課長 松井勇一 課長補佐 岩谷満夫 生涯教育係主任文化財担当

鳴海敏雄 社会教育課主任  
 宮田清治 社会教育係主事  
 木村ミエ子

8 作業員

高橋勇五郎 近藤さつ子 高橋品子 石垣京子  
 石垣貴美子 近藤キワ 石垣桂子  
 石垣良子 山内絹子 渡辺久 山内マキ  
 中村キヨ 小笠原フミ 渡辺アイ 桜庭トヨ  
 中村タミ子

9 協力機関, 協力者

秋田県教育庁文化課 大館市農林課

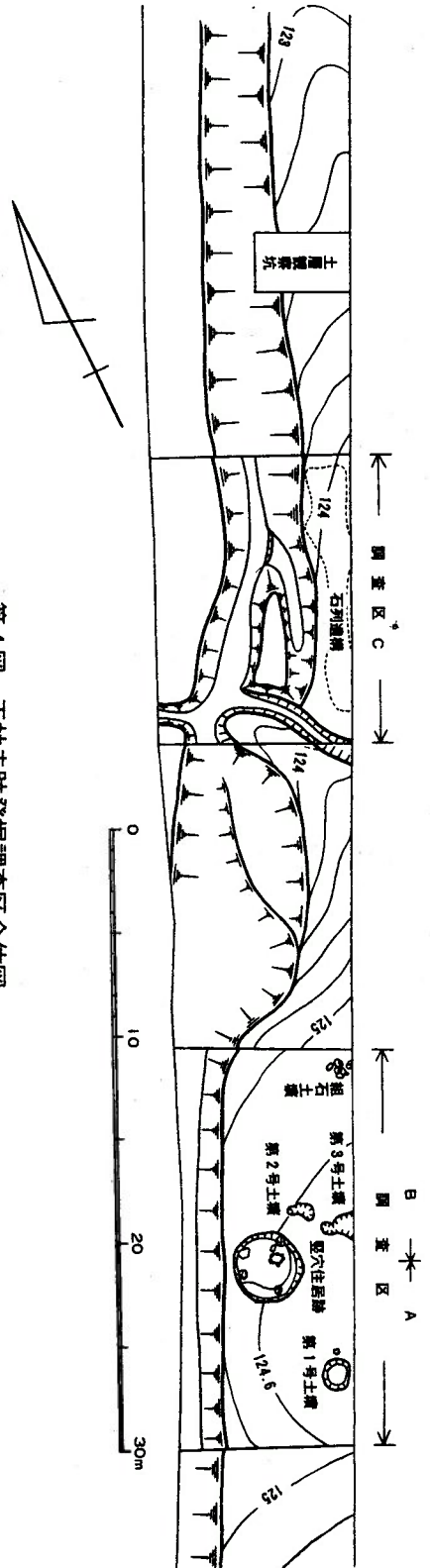
(株) 石垣建設

大館市職員 斎藤隆悦 高橋善一 石戸谷清美 石井隆

調査は杉の伐採, 杉枝の除去, 下草刈りからはじめなければならなかった (PL3)。これらの一連の作業が終了した時点で改めて「さかい堀」やその後の開墾等による破壊部分を除いた調査対象地における発掘調査地の選定を行い343.5㎡を発掘調査対象地とした (第3・4図)。調査は当該地南北約150m, 幅員約10m (1,500㎡) の工事予定線のうち, 北側の約600㎡, 南側の約400㎡がすでに完全に破壊され, 残る中央部約500㎡のうち中央部の150㎡も「さかい堀」によって破壊されていたため, 南側調査区190㎡と北側調査区140㎡, 土層観察坑13.5㎡を対象とした。南側調査区19m×10mのうち, 南の9m×10mをA区, その北の10m×10mをB区, 北側調査区をC区として調査をすすめた (第4図)。

発掘調査は4月22日午前中に発掘器材の運搬, 基地設営を行い, 午後から杉枝のかたづけ, 下草刈り作業に入り, 翌23日午前中に終了, 調査区の設定を行い, 午後からC区, B区の表土剥ぎ作業に入った。C区で

第4図 玉林寺跡発掘調査区全体図



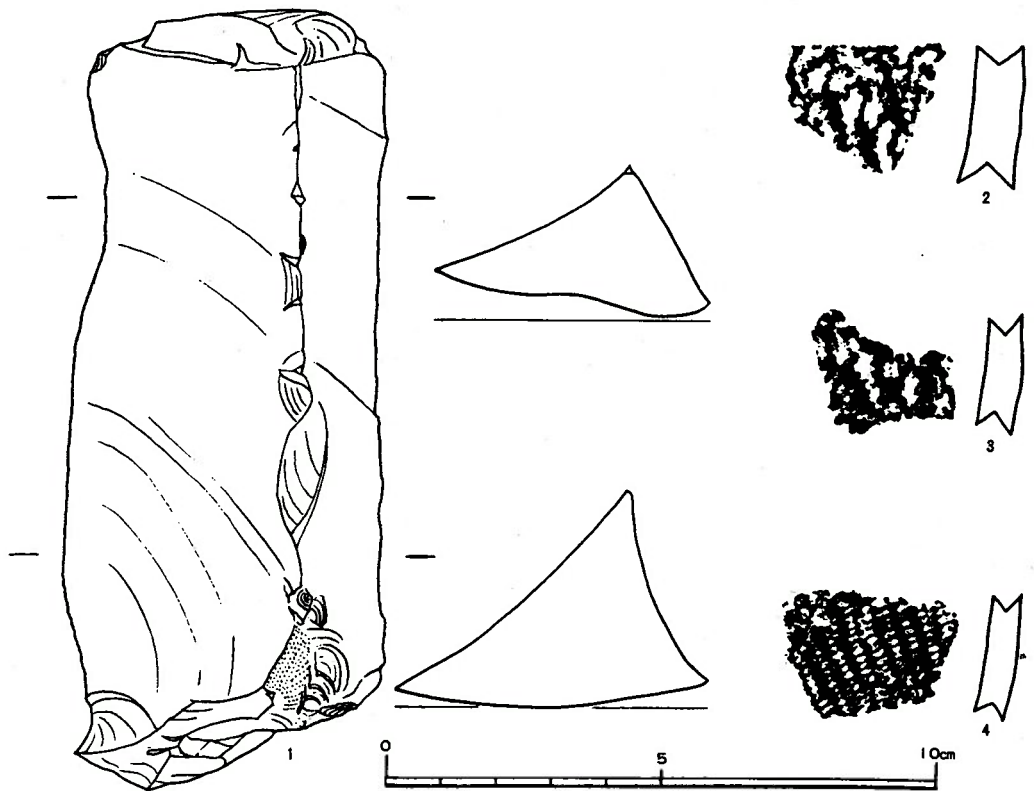
は表土剥ぎ作業の段階で、「さかい堀」東縁に沿う石列を検出、25日までに石列の検出を終え、「さかい堀」部の検出にとりかかり、26日にこの作業を完了した。B区では24日に北東隅に組石遺構、南東部に立石を検出、25日にB区全体をローム上位漸移層までの掘り下げ作業に入り、立石にともなう土壌（第3号土壌）を検出、その西側にも土壌（第2号土壌）を検出した。午後から各土壌南半分の掘り下げに入った。26日にはC区石列の写真撮影、第2・3号土壌の写真撮影を終了、A地区の表土剥ぎ作業に入った。翌27日は雨天作業中止、28日は日曜日で作業休みであるが、板橋、鳴海、石井が石列の実測作業を行った。29日に石列実測終了、B区では全体のローム上位面までの掘り下げ作業をほぼ終了、精査作業に入った。30日、B区での精査作業は杉根の為手間どる。A区では北西部のB区との間のセクションベルト南側に3mほどの掘り込み面を確認した。

5月1日、A区では全体を漸移層面まで掘り下げ、北西部掘り込みが竪穴であることの確認と、東南部に1.5mほどの円形掘り込みを確認、夕方に竪穴内から完形の深鉢形土器1個（第16図2）が出土。B区では地山（ローム層）まで精査し不規則な円形小ピット群を確認したが、掘り込み深さ・形状・方向などに統一性、規則性はみられなかった。夕方、北東組石下の溝状ピット中より黄緑色釉の塊出土。C区では石列をおこし下位面の遺構確認を行った。その結果、掘り込み深さが5～10cmほどの小ピットは数個検出されたが、石列と密接な関係をもつと考えられる遺構は検出できなかった。2日、A区竪穴検出作業に入り計5個体の完形土器を竪穴内より検出、北東部円形土壌（第1号土壌）の北側に検出した東西20cm、南北18cmの方形ピット内より首のとれた仏像が背面を上にして出土。3日、鳴海、宮田、高橋、石井が全体地形測量、板橋・斎藤がA・B区間セクションベルトの実測を行い、セクションベルト実測終了後これを取り壊し、竪穴全体の検出作業に入った。地層確察坑の掘り方をはじめ翌4日で終了、4日には竪穴およびA・B区の精査・写真撮影・竪穴実測・出土遺物の取り上げを終える。実質的な掘り方作業はこの日で終了。5・6日が休み、7日は雨で中止。8日、石囲炉の実測、縁石の取上げ写真撮影、発掘器材の撤収を終え、翌日、器材を運搬して調査をすべて終了した。

#### IV 検出遺構と出土遺物

検出された遺構は石列遺構1基、土壌3基、組石土壌1基、仏像を出土した方形小ピット1基、竪穴住居跡1戸である。これらには出土遺物から時代の判然とするものもあるが、その存在時代の不明なものもある。そこでここでは各遺構ごとに記述しながら、出土遺物についてみていくこととする。

##### 1 石列遺構



第6図 石列遺構出土遺物

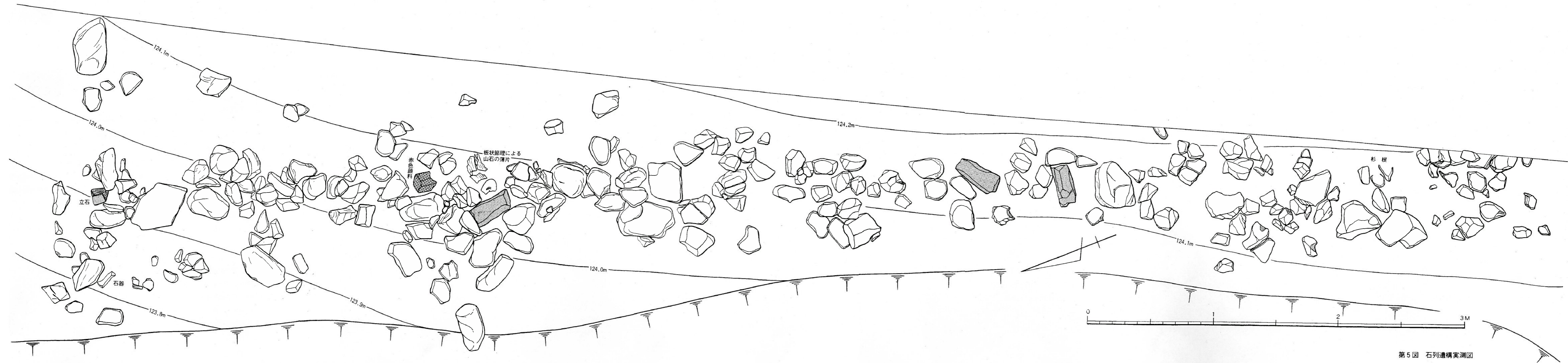
○遺構（第4・5図，PL 4・5・6・7）

C調査区東側，「さかい堀」の東縁に沿って検出された，およそ260個の河原石・山石で構成される石列遺構で，山石は全体の10%ほどの数である。調査区外東側でのボーリング調査では，南端から東側に向うものと，調査区中央部からほぼ4mほど離れた地点で，数個の石を確認することができた。

表土の厚さは10～30cm（南から北へ厚くなる）で，石の幾つかは表土上に顔を出していた。地山であるローム面に直接置かれたものはなく，いずれも3～5cmほどの黒色土が石の下部とローム面の間に介在している。

規模は北北東—南南西に長軸をもち約12mを測る。南側3分の2ほどは幅1m内外で，石の置き方も1個1個が安定した状態であるが，北側3分の1は石が重なり合って混然としており，その幅も広がる。

石列の中には比較的長大な石が4個あり（第5図の薄いアミをかけた石），3個は横位で検出されたが，北端の1個は立石の状態で出土した。ただしこの石はもっとも小さく高さ10cm内外である。また中に赤色顔料を塗った石（第5図の濃いアミをかけた石，PL 6—8の右から2個目中央の石）があり，これは五角柱の形をしている。



第5図 石列遺構実測図

みかけ上では、これら長大な石や、大ぶりの石を中心に数グループに組み分けられるようにも見えるが、判然としない。PL 6は任意に撮影したもので配石分類等の意図はない。

石列下部には前述したように厚さ3~5cmほどの黒色土が介在しローム面となる。ローム面には径5~10cm大、深5~10cmの小ピットや、径30~35cm、深5~10cm大のピットが幾つか不規則にみられたが、石列と密接な関係をもつと考えられるものは確認できなかった。比較的大ぶりのピットも人為的に掘られたものではなく抜根跡と考えられる。時期については不明。

#### ○遺物 (第6図, PL 7 右上)

石列遺構から出土した遺物は、石器1点、縄文土器片3点である。石器は列石北端部西側に、列石を構成する石材の一員として置かれていた。長軸最大長14cm、最大幅5.8cm、最大高4cmを測り、断面は主要剥離面を底辺とする三角形状を呈する。土器片はいずれも石列下黒色土中より出土したものである。2・3は器表面の凹凸が著しく、ごく一部に縄目状の圧痕らしきものも数条みられるが、はたして圧痕文なのか、軟かい面の上を回転したために凹凸の著しい面が生じたのか不明、いずれも黄褐色の同一器体もしくは、同工程でつくられた土器の破片であろう。4は地文に細かなLP斜縄文を施文、赤褐色の硬い土器である。

## 2 土壌と方形小ピット

#### ○第1号土壌 (第7図, PL 8・9)

A区東南部に位置する。開口部・底部とも長軸方向を同じにする楕円形プランで、開口部長軸163cm、短軸135cm、底部の長軸127cm、短軸115cm、深さはローム確認面から50cmを計り、床面積はおよそ1.2㎡。

開口部南西部に口径25cm方、長さ35cmの立石が据えられている。この立石と第1号土壌は密接な係り合いがあると考えられ、立石最下部とローム面との間に暗褐色土が介在していて、土壌の掘り込み面も覆土の暗褐土層中からと考えられる。立石は第1号土壌の「標石」であろう。

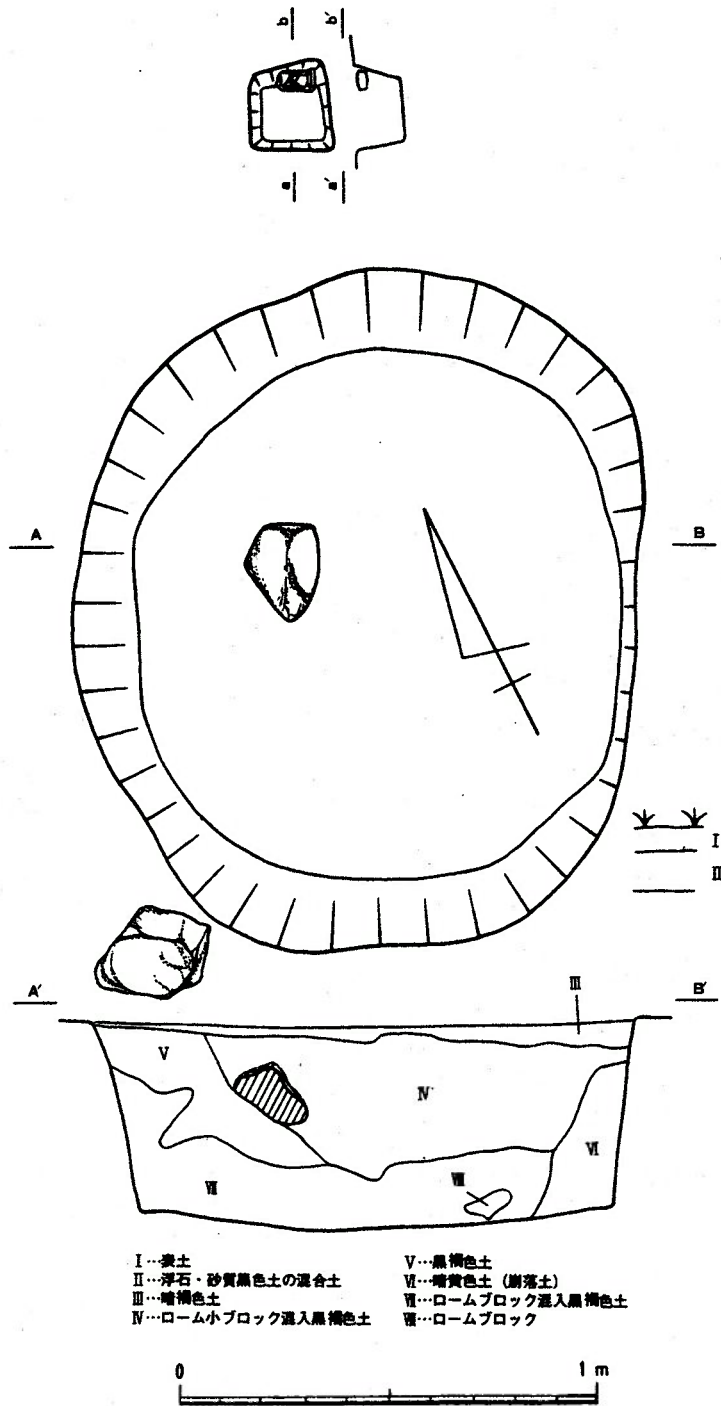
土壌内覆土は比較的単純な埋積状態を示す、覆土の大部分がロームブロック混入の黒褐色土(IV・VII層)で占められていることは、人工的な埋め戻しがあったことを示すものであろう。土壌中央やや北西寄り、床面から25cm上位のローム小ブロック混入黒褐色土中に25cm×18cm、高さ10cmの河原石があり、これは土壌西壁部の黒褐色土(V層)が埋め戻された後に、黒褐色土を底面とするように置かれたものである。

土壌内から遺物の出土はまったくなかった。

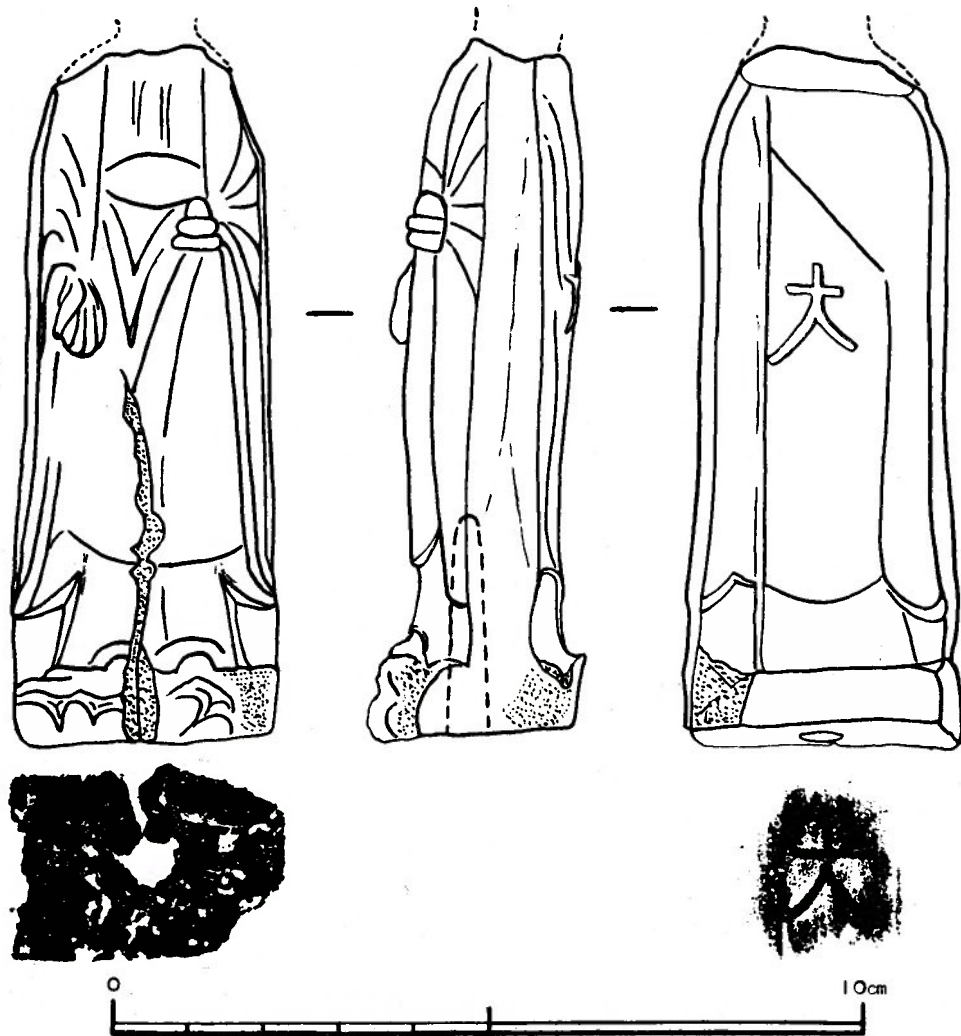
#### ○方形小ピットと出土の仏像 (第7図, PL 9・10)

第1号土壌の北壁から約30cm離れて、東西19cm、南北18~22cmの北東部がわずかに張り出す方





第7図 第1号土坑と仏像出土の方形小ピット



第8図 方形小ピット内出土の仏像

形のピットが検出された。ローム面で確認されたもので、深さは確認面から12cmを測る。ピット確認面から埋積土をわずか掘ったところ、北東側の張り出し部に、頭部を欠いた仏像が、首部を西、足部を東に、背面を上伏せた状態で出土した。方形ピット底面より8cm上の位置。

この方形ピットが、仏像を埋めるために掘られたものなのか、他の用途があって仏像を一緒に埋めたものなのかは速断できないが、張り出し部にしかも浮いた状態で検出されていることから、後者であろうと考えられ、例えば、今次調査ではプラン確認はできなかったが、角柱掘立柱建物のひとつの柱の柱根部に張り出し部を設けて仏像を埋納したと考えられる。

ローム面から表土までは約45cmの埋積層があり（第7図）、この方形ピットもしくは角柱掘立柱穴は第Ⅱ層（玉林寺建立時の地ならし層と考えられる浮石層—後述—と砂質黒色土の混合土）

からの掘り込みと考えられることから、その深さはおよそ50cmとなり、仏像は柱穴のかなり深い部分（底からおよそ $\frac{3}{5}$ の位置）に置かれたものと考えられる。

○仏像（第8図，PL29）

現高9.2cm，頭部が欠損しているが全体では11.5cmほどになる。型作りで左右側面に型合せ面があって、合わせ目をヘラ削りで調整している。色調は黒で、瓦器質の焼成である。底部中央に深さ3cmほどの孔が穿れているが、これは釘状の突起物に差し込んでこの仏像を安置するための孔であろう。

正面は左手に宝珠をもち、右手は手の内を開いて下方に向けている。胸の下に下裳を簡略化して描いたと思われる徴隆線が「こ」字状にみられる。全体を覆う法衣も、徴隆線によってやわらかな質感を表現している。体下部では法衣の裾部を浮彫りにして量感を出している。足部は法衣の裾からわずかに足甲をのぞかせている。台座は磨滅、剝落があって判然としないが、不定形の蓮弁文がみられる。

側面からみると全体がやわらかな丸みをもってつくられ、法衣が徴隆線によってゆったりと垂れている線と、裾の浮彫り手法によってふくよかな感じがよくあらわされている。

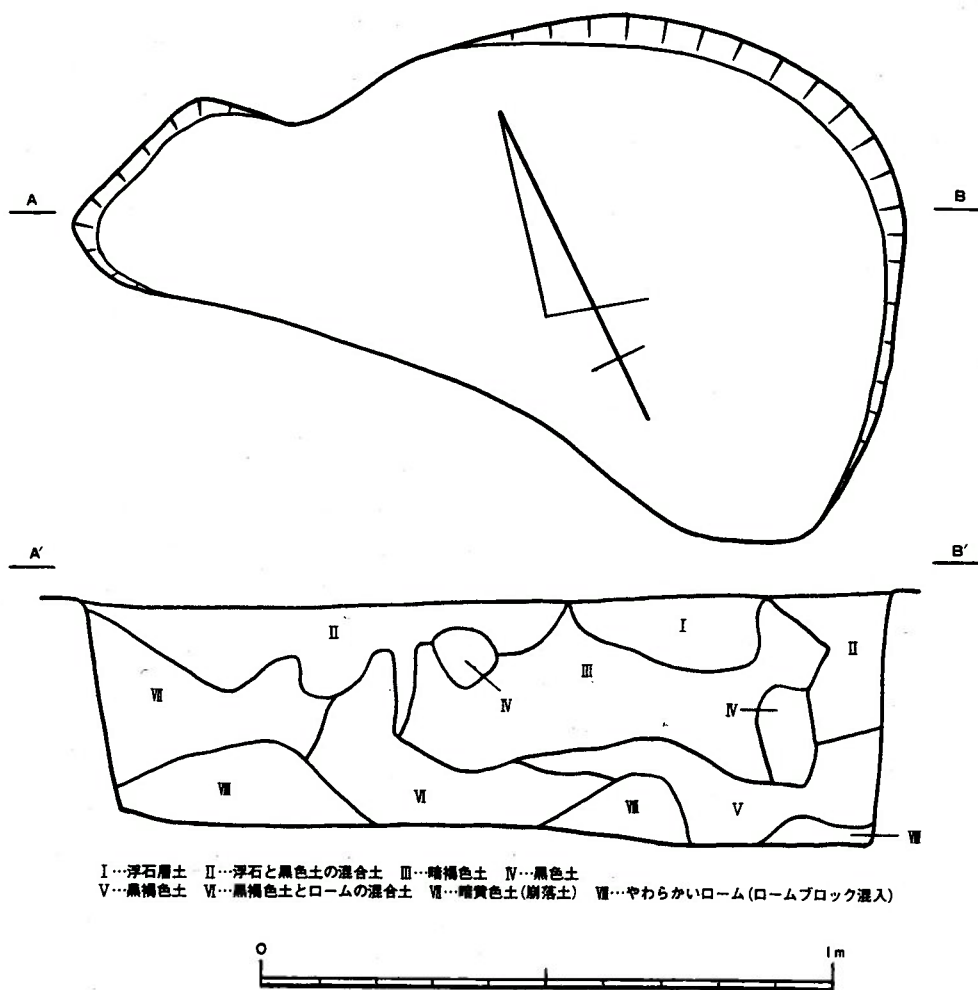
背面は、両腕から垂れる簡略された直線的な二本の線によって三分され、ほぼ中央部に「大」字が陽刻されている。「大」字は母型に正字を刻んだためか、像に現わされた文字は反字になっている。

この仏像は頭部が欠けているものの、地藏菩薩像と考えられ、岩手県平泉の中尊寺金色堂左壇地藏菩薩像に比較できよう。ただし右手がやや上位に位置している。背面の「大」の字はその意味するところは不明である。この地藏菩薩像は、六体が一連の釘状の突起物をもつ器具に安置されていたものの一体と考えられ、「大」字は六体のうちの一体であるこの地藏菩薩像をあらわす、あるいは意味する「しるし」とも考えられる。あるいは菩薩の異称である「童子」と寺で召し使う童子が混合されて「大童子」の「大」字が記されたものとも考えられる。あるいはまた大館の「大」でもあろうか。

○第2号土壙（第9図）

B区南側ほぼ中央部に検出された土壙で、長軸を西北西—東南東にもつ平面形が不整ひょうたんな形を呈する。長軸145cm，短軸最大長85cm，壁が全体に直上して、開口部と底面がほぼ同形で、深さはローム確認面から37～44cmを計り、底面は西から東に緩傾斜している。

土壙覆土は8層からなり、最上面を浮石層および浮石と黒色土の混合土が蓋状に覆う。この浮



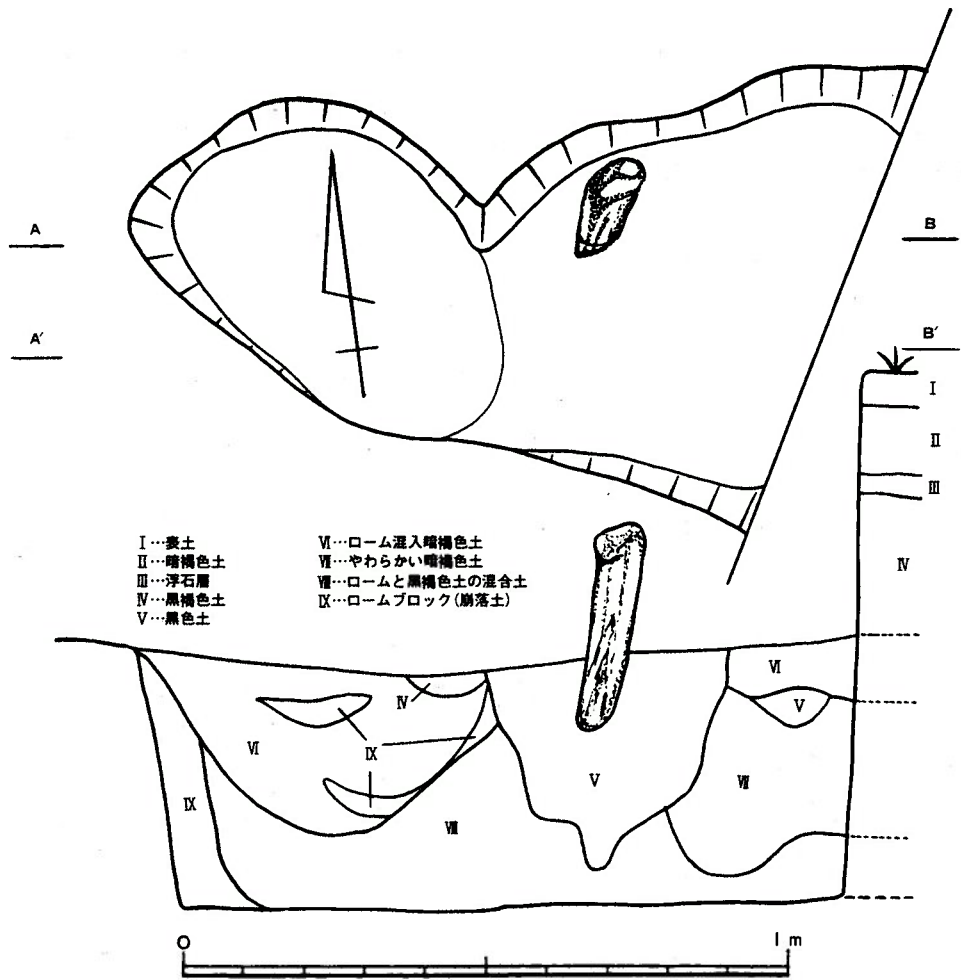
第9図 第2号土壌

石層は自然堆積層ではなく、明らかに下部を人工的に埋め戻したあと、意識的に覆ったもので、このことより第2号土壌は、浮石層が自然堆積した後に構築されたもので、玉林寺に関わる土壌であろうと考えられる。

土壌内から遺物の出土はまったくなかった。

○第3号土壌 (第10・11図, PL11・12・26右上7)

B区南東部に検出された土壌で、長軸を西北西—東南東にもつ平面形が不整ひょうたん形を呈し、見かけ上は二つの土壌の切り合いのようにみえるが、埋積土層観察によって一つの土壌であ



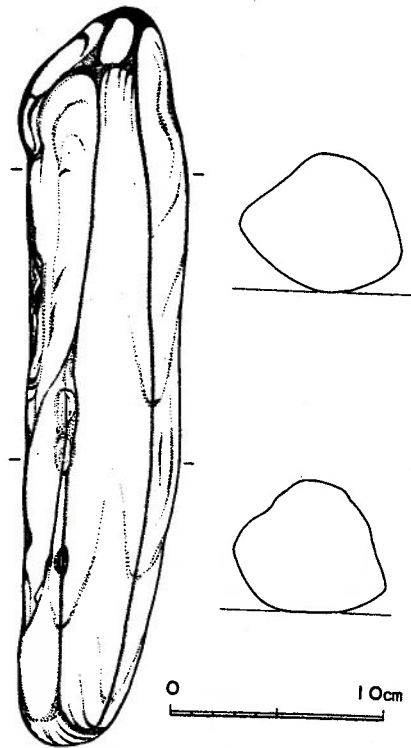
第10図 第3号土坑

ることが判明した。東端は調査区外東側へ延びている。現況で長軸115cm，短軸最大幅75cm，深さはローム確認面より43cmを計る。底面は西側がわずかに落ち込み，くびれ部に明瞭ではないが1cm内外の段縁が円形にみられる。

調査区東壁の断面層と土坑内埋積土層より次のようなことが判った。6cmほどの厚さの表土（腐蝕土）の下に11cmほどの暗褐色土層があり，その下位に厚いところで5cm，平均2cmの浮石層が，A・B区全体を覆う。ただし浮石層が薄いところ，まったくみられないところ，後世の掘り込み，攪乱等でとばされてしまったところなどがあって，明瞭な一枚の浮石層がみられるのではなく断続しながらみられるといった状況である。この浮石層が，十和田火山の最も新しい噴出物の降下堆積物である大湯軽石質火山礫層に対比され，玉林寺跡の西方1.4kmの塚の下遺跡発掘調

査で確認された大茂内降下火山灰層に同定される火山灰層で、堆積層幅が塚の下遺跡より厚いことから、降下後、東側の山裾側から雨水等によって移動堆積した第二次堆積層である可能性も高い。すなわち第3号土壙は浮石層堆積以前の土壙である。

土壙確認面以下の土壙内覆土の埋積状態をみると、壁下に壁崩落土と考えられるロームブロック層(Ⅸ層)が縦位にみられることは、土壙掘り上げの後、短期間ではあるが放置されていたと考えられる。そして次にⅧ層とⅦ層が埋め戻され、この後、何んらかの意図で西側部分が掘り込まれ、それからⅥ層が土壙全体に埋め戻された。これによって土壙全体が埋められることになるが、後に、土壙ほぼ中央部北壁寄りに径40cm、深さ35cmほどの乳戻状尖底形のピットが掘り込まれ、そこには黒色土だけが意識的に埋め戻され、さらに陽



第11図 第3号土壙の立石

根状石棒を立てている。すなわち第一次の土壙が掘られてから後、少なくとも二次・三次の二期にわたる小規模ピットの掘り込みが行なわれ、最終時のピット埋め戻しの際には、立石を埋設していることを知ることが出来る。二次・三次の小ピットがたまたま一次土壙上に重なったとも考えられるが、一次土壙の壁面に切り合いがみられないことと、一次土壙の下位堆積が土壙全体に及んでいることから、これはあくまでも一次土壙の規模・形状を念頭において構築された一連の土壙施設であると考えられる。

土壙内からは立石に使用された陽根状石棒を除いて、遺物の出土はまったくなかった。

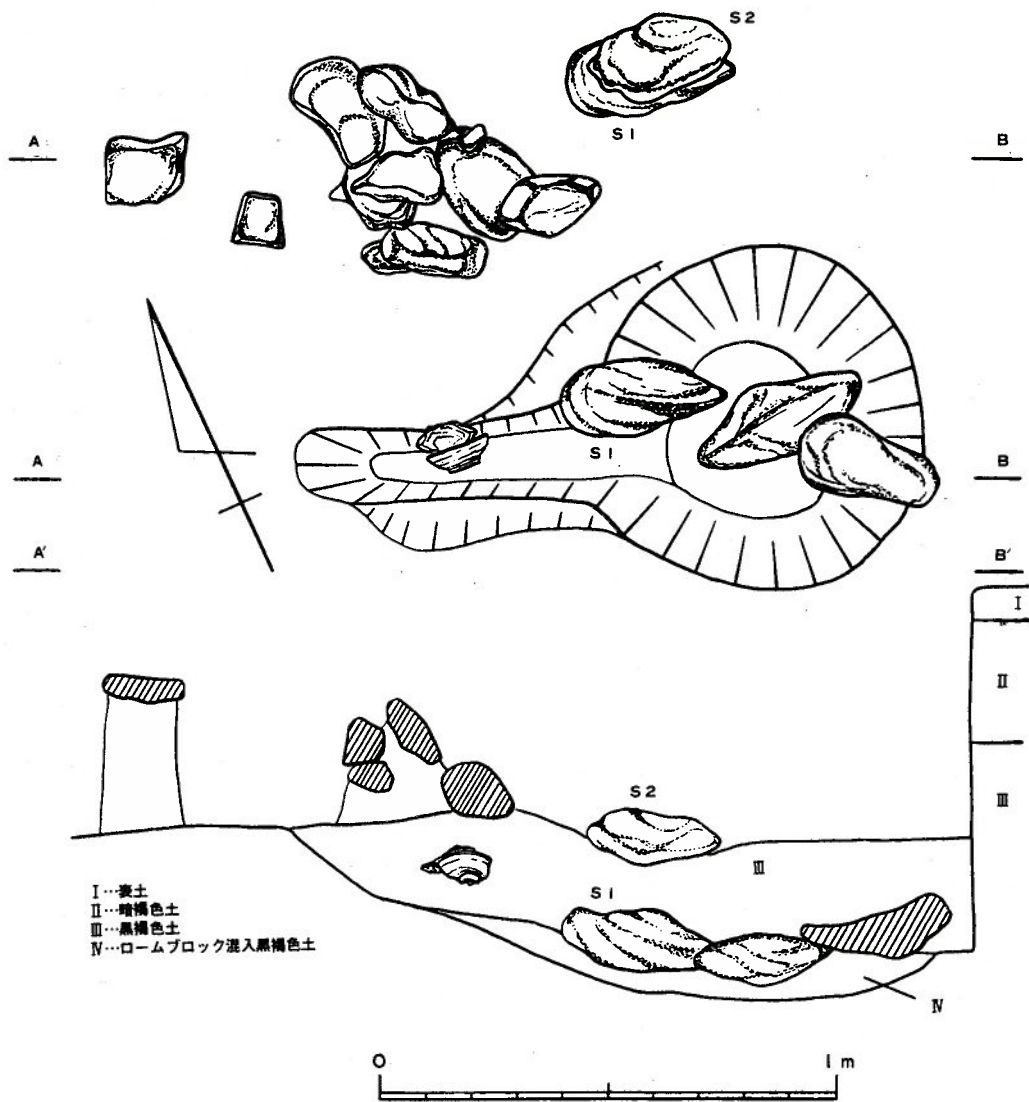
立石に利用された石は長さ34.3cm、厚さ6~7.5cmの自然石で、底面(第11図を正面とした背面側)は磨滅している。一方の先端部(第11図の上位側)にはふくらみがあって、明らかに陽根を意識して立石に利用されたものである。

### 3 組石土壙と出土の埴

#### ○組石土壙(第12図, PL13・14・15・16)

B区北東隅に検出された組石とその下部の土壙からなる一連の遺構である。

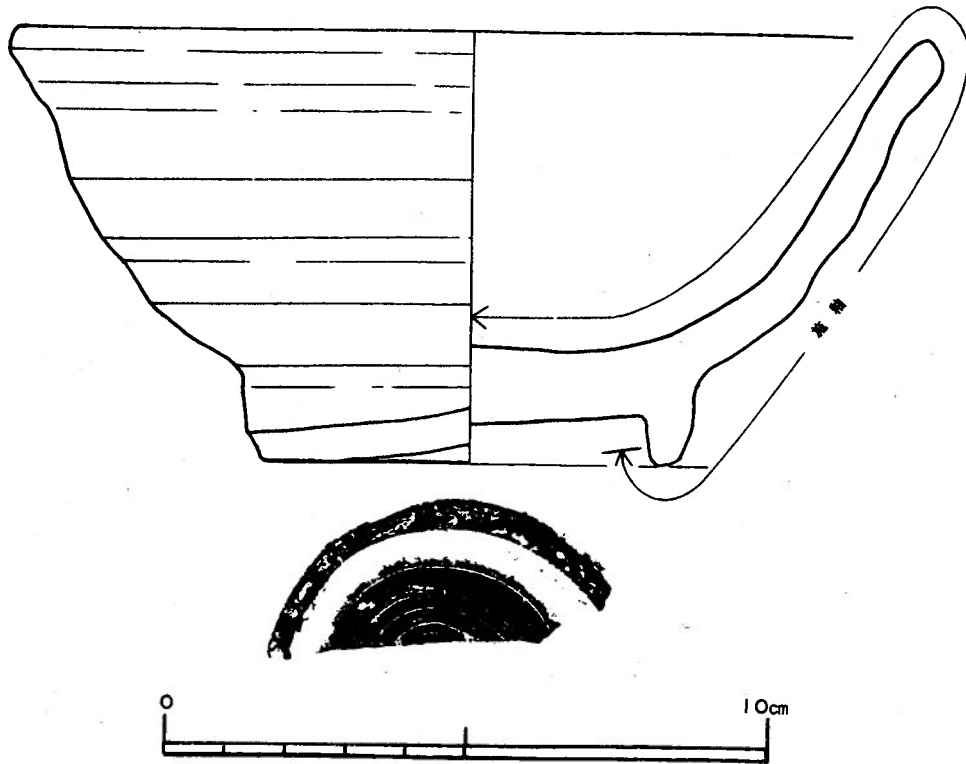
表土下の暗褐色土層(Ⅱ層)と黒褐色土層(Ⅲ層)に、大小12個の河原石からなる組石が、北西-南東を長軸線として検出された。B・A区でⅡ層とⅢ層間にみられた浮石層は、範囲は明確には不明であるが、この組石周辺ではまったくみられない。



第12図 組石およびその下位の土壌

これら組石（以下、上部組石と呼ぶ）は西側に離れた2個の石と東側に離れた一個の石（第12図S2）を除いて9個が重なりあっている。（以下、上部主体組石と呼ぶ）。S2検出時においてその下位にS1を確認していたことから、上部組石下に下部施設があるであろうことは検出時から予想できた。

上部組石の実測と写真撮影を終えてそれらを取りはずし、下部遺構の確認作業を行ったところ、S1の西側にあらたな2個の大きな石が検出され、これらが円形土壌の上位に置かれたものであることがわかった（以下、下部組石と呼ぶ）。また上部主体組石下には溝状ピットが、上部組石長軸上に延びていることがわかった。土壌は径70~75cmの摺り鉢状に凹む円形ピットと、その西



第13図 組石土壇出土の埴

側に長さ70cm、幅18cmほどで延びる溝状ピットによって構成され、全体平面形は「柄杓」形を呈する。柄の部分にあたる溝状ピット底面は西から東に、すなわち円形ピットに向って急激に傾斜する。最西端の確認面から円形ピット中央の最深部までのレベル差はおよそ35cmある。溝状ピットほぼ中央北壁寄りから埴が出土した。

土壇覆土の埋積状態と組石・ピットの間をみると、上部組石の最西端の石はⅡ層（暗褐色土層）中にある。あるいはこの石だけは組石とは関係をもたない石であるのかも知れない。上部主体組石の最上部にある石のいくつかはⅡ層中にその一部をのぞかせているが、石の根部はすべてⅢ層（黒褐色土層）中に位置している。そして上部主体組石の基部とS<sub>2</sub>は、土壇確認面レベルに位置する。下部組石はⅢ層最下部にあって、下部組石下端から円形ピット底面までの約10cmの間には、ロームブロックを混入する黒褐色土が埋積している。

○溝状ピット中から出土の埴（第12・13図、P L 17・29）

円形ピットから西に延びる溝状ピットのほぼ中央部北壁寄りの底面から7cm上位に、口縁を北に向けて半欠けの埴が出土した。上部主体組石の中心直下に位置する。

口径15.2cm、高さ7.1cm、高台外縁径6.7cm、高台の高さ0.7~0.8cm、底部は中心部がややふくらむ凹底状で、底面に回転ヘラおこしの際の胎土細粒の移動痕がみられる。高台内側3分の1か



ら外内面全体に黄緑色の釉が施こされている。

体部断面を観察すると、底部および高台内側は淡褐色で陶器様であるが、底部立ち上り部から体部全体および高台外縁は白灰色で磁器化している。この埴は、成形は陶器様であるが、青磁をつくることを意図として窯入れされ、焼成が完全に磁器化するまでに至らず、半磁半陶の埴が出来たものと考えられる。高台内側にまで施釉されていることより、大量生産製品ではなく、1個ずつ丁寧に作られた製品で、大生産地産のものではなく、近世初頭の地方窯で作られたものと考えられるが生産地については不明である。

この組石土壌からは、埴のほか遺物の出土はまったくなかった。

#### 4 竪穴住居跡と出土遺物

##### ○竪穴住居跡 (第14・15図, P L 18~24)

A・B区間に検出された径3m~3.3mの円形プラン竪穴で、床面積は8.04㎡を計り、柱穴・石囲炉を除いた面積は7.51㎡である。

竪穴中央が、ちょうどA・B区間のセクションベルトに当たったため、竪穴覆土およびその東側の覆土の全体の土層観察ができた。最上位に厚さ7~8cmの表土(I層)があり、その下に軽石粒(浮石)を混入するかたくしまった黒色土層(II層)が、その下位に浮石層が厚さ5~2cmで断続的にみられる。その下位に暗褐色土層(IV・IV'層)があって、これまでが竪穴埋積後の上位堆積自然層である。暗褐色土層下に、ローム小ブロック混入暗褐色土(IV''層)、ローム小ブロック混入黒色土(V層)があって、これらが竪穴埋積最上位層で、その下位のロームブロック混入黄褐色土(VI層)が、竪穴埋積土の主体で、これが床面全体を覆い、中に炭化物を多量に含む。

床面は全体的に大きく波うっているが、生活に支障をきたすほどのものではない。東壁下と南壁から南西壁下にかけて、幅15~20cmのベット状遺構がある。

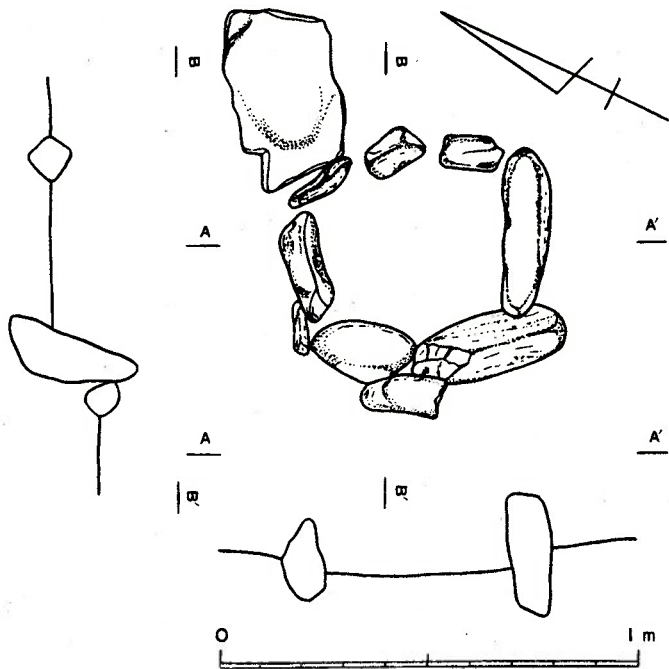
柱穴は、北東壁下に1本、南壁下1本、西壁下1本の、1本1対型の配置となっている。ほかに西壁寄りと南壁下ベット状遺構に、突き込みによる小柱穴が点在する。南西壁外に北東壁下柱穴に対称するピットがあり、あるいはこの二つの柱穴が棟受けにあたるのかも知れない。

石囲炉は床面やや中央より北東に偏し、65cm×70cmのほぼ方形に大小9個の河原石を縁石とする。縁石は小さいもの(15~20cm大)はその半分、大きいもの(25~40cm大)は3分の1ほどを床面に埋めて構築している。炉床はほぼ全面が焼けているが、それほど強くはない。

##### ○出土遺物

竪穴住居跡内からは5個の完形土器と、底部と体部の一部を欠く1個の深鉢形土器、台石、石皿、磨石、石棒、石刀形石製品、炭火材が出土した。

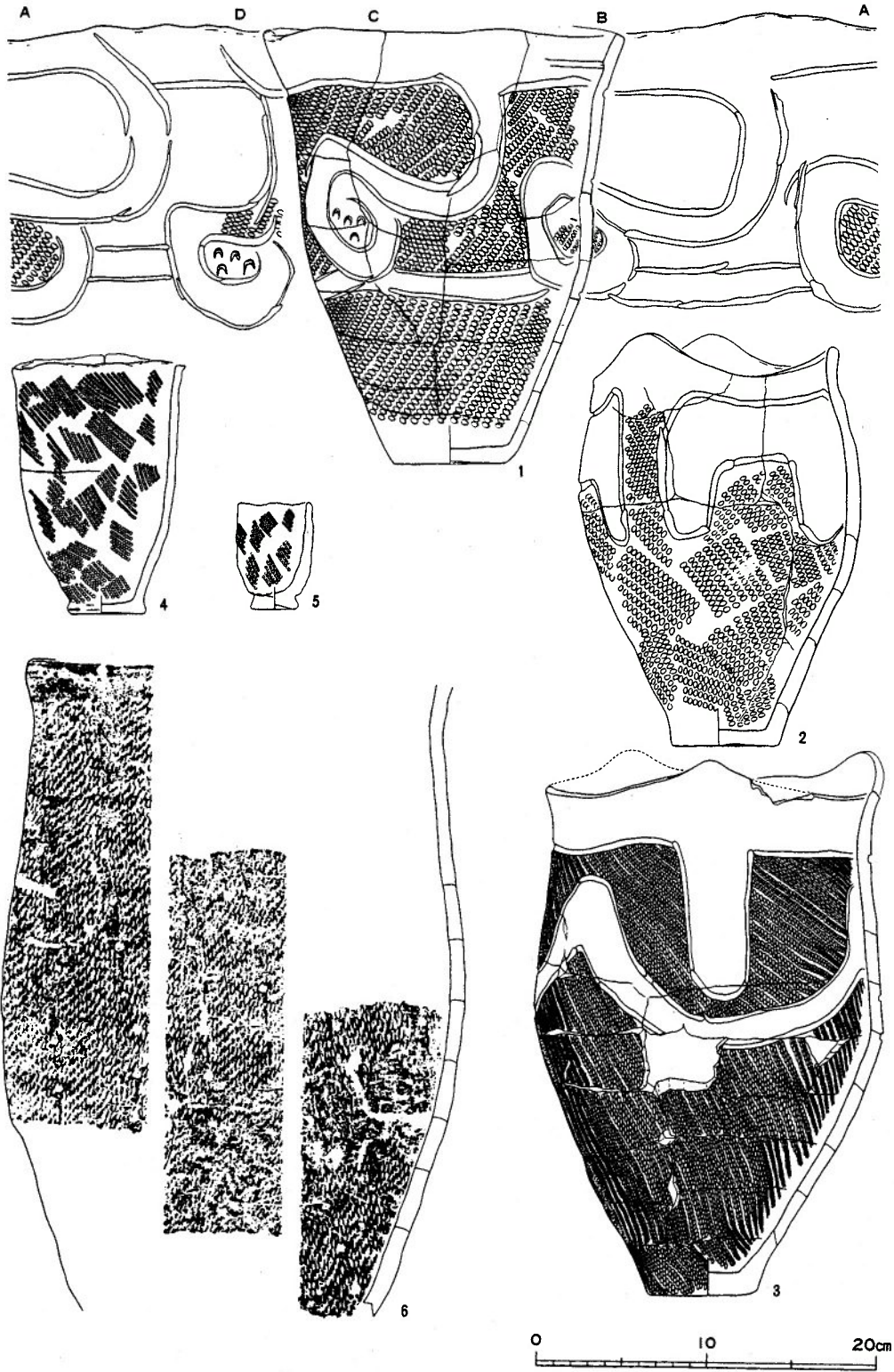




第15図 竪穴住居跡内の石組炉

○土器 (第16図, P L 25)

第16図1は、口径19cm~21.5cmの楕円形口縁で、高さ25cm、底径6.8cmを計る。口唇は平縁で、口縁は不規則な波状を呈し、口縁内面に折り返しがみられる。口縁部文様帯は磨消し無文で、体部文様帯とは一条の沈線で画されるが、沈線は完結してめぐらされるのではなく、体部文様帯主文様である磨消し懸垂文とうず巻文の組合せ文を介しながら口縁部文様帯と体部文様帯を画している。体部文様の地文はR L斜縄文で、底部上位2.5cmまで体部全体にびっしりと施文されている。体部主体文様は磨消しの懸垂文とうず巻文の組合せによる「ㄱ」状文で、器体を縦四分して割り付けている。しかし、割り付けがうまくいかなかったようで、第16図1のA・B・Cの各文様は正しく描かれているが、D文様だけは割り付け部が狭くなったために、磨消懸垂文が二条の接する沈線で代用され、うず巻文だけが正當に描かれている。A文様の懸垂部右側沈線は口縁磨消し無文帯を斜に横切って口唇部まで延びていて、このこととA文様の右隣りに位置するD文様の割り付け失敗を考えると、この土器の体部文様割り付けはAから描き始めて、B・C・D順に描いていったと考えられる。うず巻文の中心部には、地文がそのまま施こされたもの（A・B文様）と、4個の半截竹管文が施文（C・D文様）された、二つのグループに分かれる。それぞれのうず巻文は、幅2.5cm内外の平行沈線磨消し文で連絡している。なお沈線内には沈線方向と軌を同じにする細かな条が走っていて、これは禾本科植物茎による施文と考えられる。この土器の下部に炭化材が横位に入っている。



第16图 豎穴住居跡内出土土器

第16図2は、口径14cm~15.5cm、高さ23.5cm、底径6cm、最大径が体部中央よりやや上位にあって16.5cmを計る。口唇はやや丸みをもった平縁で、口縁は大ぶりの3つの山形からなる波状口縁である。口縁部文様は磨消し無文帯で、体部地文にはLR斜縄文が施こされ、山形口縁間に、沈線で画された「凹」状の磨消し文様を配する。上半部に媒が多量に付着している。

第16図3は、口径20cm、高さ29.5cm、底径6cm、最大径が体部ほぼ中央部にあって20.5cmを計る。口唇は平縁で、口縁は3つの山形からなる波状口縁である。口縁部文様は磨消し無文帯で、体部文様とは一条の沈線で画されるが、1の土器同様、山形口縁下に懸垂文を介在している。地文はLR複節斜縄文で、山形口縁間に突起部をもつ並行沈線によって画された波状文が描かれる。山形口縁と懸垂文と波状文がバランスよく配されたシンプルな土器である。

第16図4は、口径10cm~10.5cmのいびつな円形で、高さ14.2cm~14.6cm、底径4.2cm~4.7cm。口唇は平縁で、口縁は不規則な波状を呈する。体部には5~7条で条長2~3cmのLR斜縄文が、器体の凹凸によって切れぎれにほぼ全体に施こされる。底部は張り出す。内面は底部から1.5cmほどのところまで擦痕が横走る。笹葉状のものでの横ナデ痕であろう。

第16図5は手づくね土器で、口径4.3cm~4.6cm、高さ6cm~6.2cm、底径2.2cm~2.3cm、口唇はつまみ出しにより丸みをおび、口縁は不規則な波状を呈する。器表には全体にLR斜縄文が施こされるが、器体の凹凸および使用による手ずれで、地文が消失している部分がみられる。

第16図6は、口径25cm、現高38cm（いずれも図上復原）を計る、底部および体部の一部を欠く深鉢土器で、器表全体に細かなRL斜縄文がびっしりと施こされる。体部上位3分の2ほどまで媒が付着している。

以上が竪穴住居跡内出土土器で、6は組石炉の北東部から、2が竪穴ほぼ中央西側から、他は南西部のベット状遺構上からの出土で、これらがこの竪穴で使用された土器のセットをなし、本竪穴住居跡の存在時期は、縄文時代中期末葉から後期初頭の、大木10式併行期であろう。

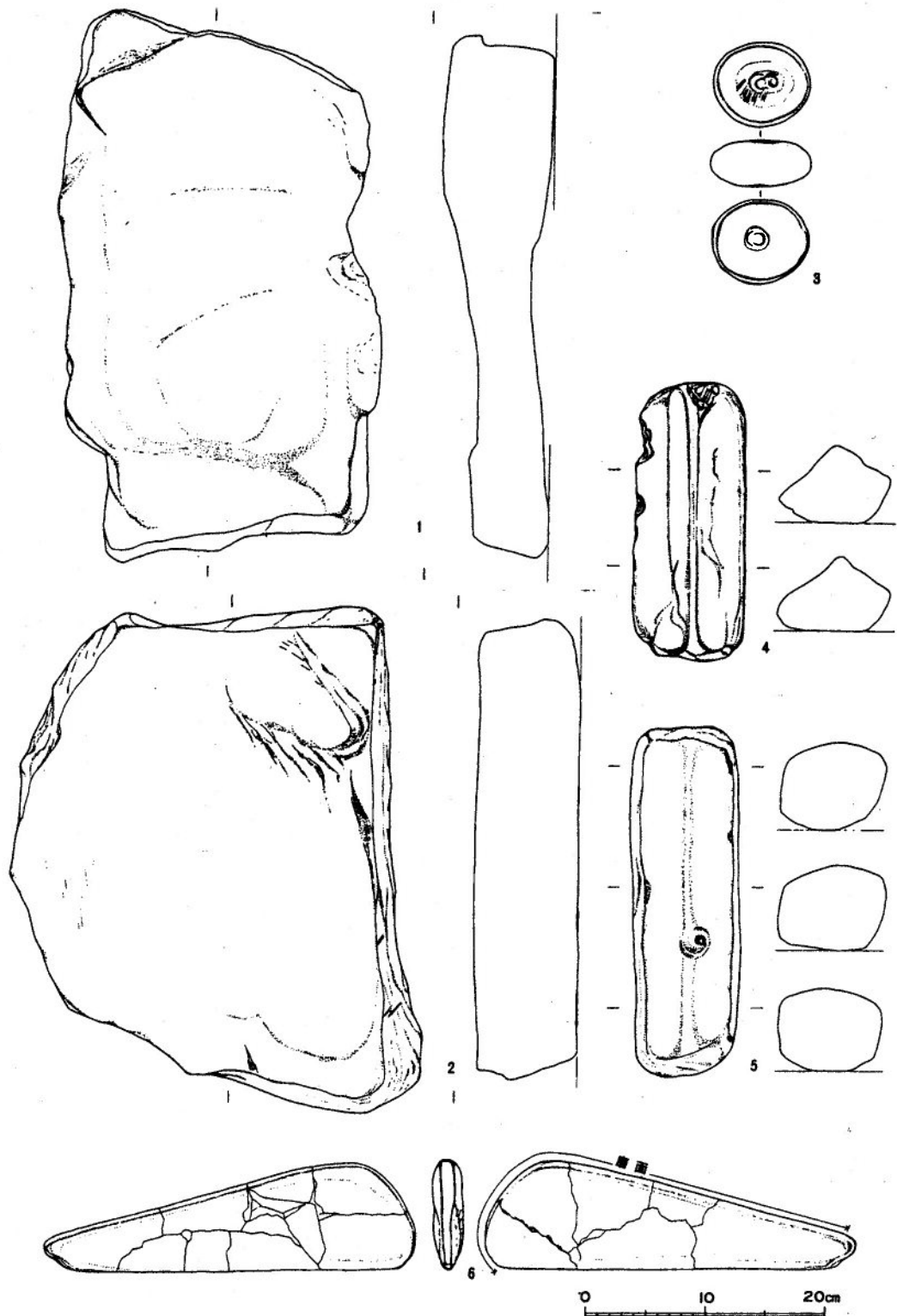
#### ○石器（第17図、PL26）

第17図1は石皿。タテ45.5cm、ヨコ26cm、厚さ6cm~9cmの扁平な長方体の自然石を利用し、表背二面に使用痕が認められるが、図示した面（表）に顕著である。9cmほどの厚い方を「陸」に薄い方を「海」に利用している。組石炉北端部に炉の袖石のようにして出土。

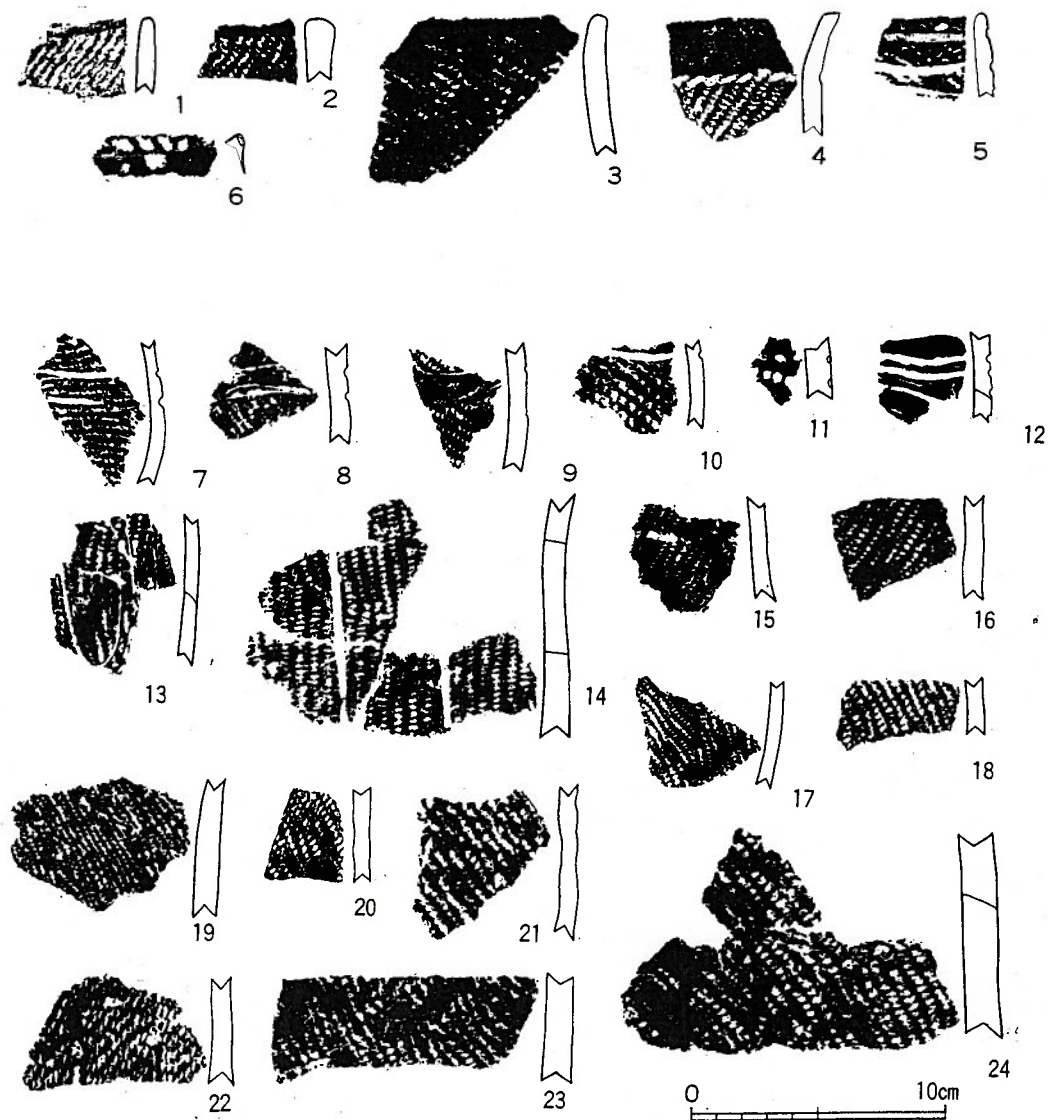
第17図2は台石、タテ41cm、ヨコ30cm、厚さ8cmの扁平な長方体の自然石を利用して、石皿のような「海」部はみられない。表面（図示面）に有機汁と考えられる黒いシミが全体に付着している。竪穴北西壁下にやや斜位に置かれて出土。

第17図3は磨石。長軸8cm、短軸7cm、厚さ3.8cmの扁平な楕円形自然石で、全体が磨滅していて、表裏面ほぼ中央部にわずかな凹みをもつ。竪穴ほぼ中央北側床面上から出土。

第17図4は石棒。長さ23cm、幅9cm、厚さ6.4cmの自然石で、器体面に工作は施こされていない。



第17圖 豎穴住居跡内出土石器

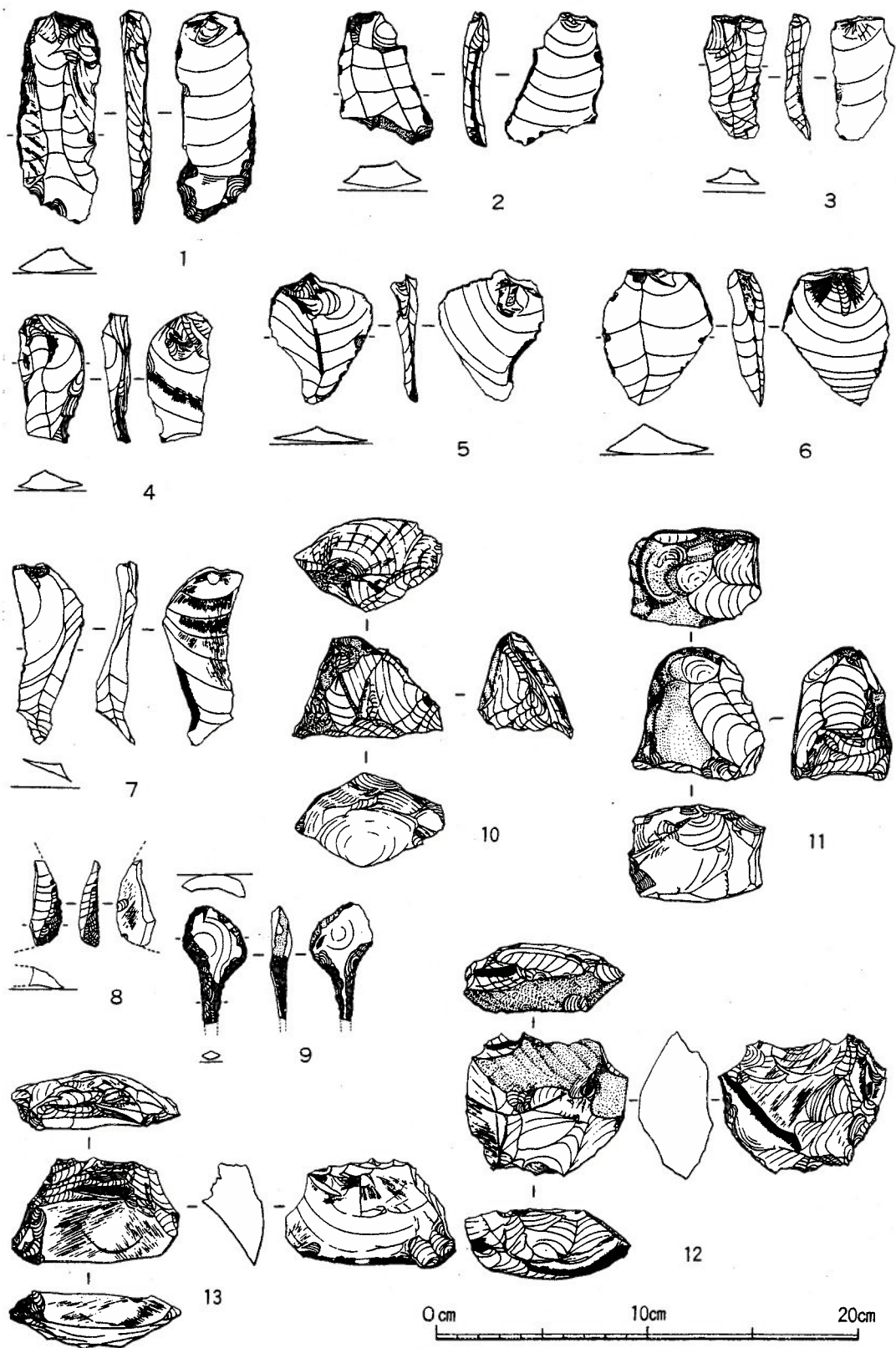


第18図 玉林寺跡覆土からの出土土器

い。竪穴北東壁下から出土。

第17図5は石棒。長さ20cm、幅9cm、厚さ7cmの自然石で、全体が磨滅してスベスベしている。竪穴北東部、1の石皿と4の石棒の間から出土。

第17図6は凝灰岩製石製品で石刀状石製品と呼んでおく。竪穴東壁（第14図×印）に柄部を下に直立して立てかけてあった。発掘作業中に作業員がこれをあやまって細片に壊してしまったため、出土状況の詳細は不明。細片を接合復原してわかった形状は、長さ30.7cm、幅3cm～8.8cm、厚さ2.5cm～3.1cmを計り、全体を研磨してつくっている。図の峰部には0.9cm～1.5cm幅で平らな磨面があり、柄部先端と刀部ほぼ中央部に焼こげがみられる。



第19図 玉林寺跡覆土からの出土石器



## 5 その他の出土遺物

### ○土器 (第18図, P L 27)

A・B区覆土から土器片は細片を加えて60点ほど出土したが、その中から口縁部、体部形状の比較的明瞭なもの、大きな破片を図示したのが第18図である。おおかたは縄文中期のものと考えられるが、中で5, 12は後期の十腰内I式に比定されよう。

### ○石器 (第19図, P L 28)

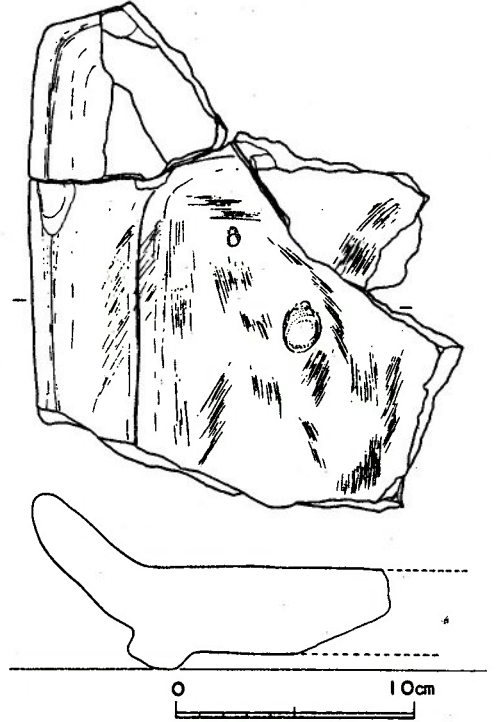
石器もA・B区覆土からの出土がほとんどである。その代表的なものを図示したのが第19図で、1~8が搔器および搔器様石器、9が石錐、10~13が石核である。

搔器は稜が2本のもの(1~4)と1本のもの(5~7)に大別されるが、エンドあるいはサイドに刃部あるいは使用剥離がみられ、主要剥離面には使用擦痕もみられ、多様な用途にもちいられたと考えられる。

石核は、平らな底面部をもつ尖頭状のもの(10, 11)と、横に広がる蟹甲状のもの(12, 13)に分けられるが、それらが石核の中のどのような位置にあり、これらからつくり出される剥片がどのようなものかは、よく分からない。今後の課題としたい。

### ○石皿 (第20図, P L 13右下)

竪穴住居跡の北側から単独で検出された。現長21cm, 現幅18cm, 現高7.5cmを計り、縁と脚をもつ石皿の左側上半部分である。使用面には擦痕が長軸方向を基調にみられ、縁壁下には横位のものもみられる。



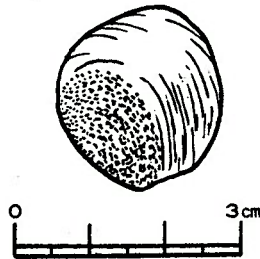
第20図 竪穴住居跡外北部出土の石皿

### ○陶丸 (第21図, P L 29)

大きさ2.1cm~2.3cm大のややいびつな球状で、製作の際の粘土を丸めた跡が残る。一部に黒色の焼けこげ痕がみられる。これは鉄砲の丸弾と考えられ、焼けこげ痕は火薬の爆発痕であろう。C区「さかい堀」から出土。

### ○寛永通寶 (P L 29)

B区表土下より出土。



第21図 C区「さかい堀」出土の陶丸

## V 玉林寺跡と鬼ヶ城について

今次の発掘調査は、中世末期に存在したと伝えられている玉林寺の寺跡の発掘調査であった。結果は、当該時代のもので考えられる、地蔵菩薩像と標石をもつ土壇（第1号土壇）、不整ひょうたん形の土壇（第2号土壇）、組石土壇と組石土壇出土の黄緑色の半磁半陶の塊が検出・出土した。これらの出土品からみて、玉林寺が当地に存在した事実はみとめられてよいであろう。しかし、伽藍等の建物跡は検出できなかった。

それでは玉林寺が当地へ建てられた事由は、ということになると近世に記されたわずかな資料によるしかない。また、昭和59年初冬の現地踏査で発見された城館跡も、玉林寺とほぼ同時代に存在した「鬼ヶ城」であると考えられることから、数少ない資料を追って、玉林寺・鬼ヶ城についてみたい。

玉林寺についての一つの記録は、大館地方に書き残された「浅利與市侍分限」にみられる。これは現在知られるものが三本あって、それらの時代的前後関係は不明、元書と写書についても不明であるが、今これを掲げてみると（『大館戊辰戦史』所収）、

一つは安永二年巳壬三月に、白瀧但馬末胤、菊地平右衛門隆真が、川口村住、佐藤兵助に宛てた、元禄十一年戊寅八月五日に御公儀様御尋に対し十狐村で会談の上書き上げたものの写しに、

「寺領七百刈 御菩提處 玉林寺 右は十子村和田に舊跡あり」

という記録と、二つめは送られた側の川口村、佐藤源助氏提出の

「御位牌所 御菩提所 寺領七百刈 玉林寺 右は十狐村和田に舊跡」

という記録と、三つめは秋田郡坊澤村之住 長崎尾張 控 にみられる

「一 寺領 稻七百刈 米五斗入五十俵 鳳凰山十狐村和田本屋敷 玉林寺」

というものである。三つとも十狐村和田に玉林寺跡のあることを記していて、調査地と玉林寺の関係については記載がないが、三つめの資料に鳳凰山の名称がみられるのは興味深い。

次に安政年間の成立と考えられる『郷村史略』（大館市二井田一関家所蔵）の、大館町の項に、次のような記載が見られる。

「玉林寺 禅宗松原補陀寺末、鳳凰山と号す、浅利家の牌處と云、三代の位牌あり、（中略）。

又、大館旧記に云ク 玉林寺はむかし大永の頃、此處に移したる寺なり、元ハ天鞍小鞠合の辺り、鳳凰山の麓にあり、今も猶寺跡あり、開山は松原補陀寺閑居守端禅師也、比閑居鳳凰の山上に座禅しける時、浅利与市則頼此山に狩し、山上にのぼりて禅師を見るに、坐禅して小鳥其肩膝に遊ふといへとも、おとろき去る事なし、則頼是を拝して山を下り、麓に一寺を建立して、代々の牌所とす、依てこの寺に、則頼 勝頼 頼平三代の位牌ありて、（中略）

右三代の位牌左ニ

明庵珠光大居士 天文十九甲子六月十六日 浅利与市則頼 十狐村にて死

機庵勝全大居士 天正十辛巳五月十七日 浅利民部勝頼 長岡にて死去

宗清大居士 慶長三戊正月八日 浅利左京頼平 大坂にて死去

右三代の位牌 武具 宝物とも 此寺に所持せりと云]

とある。現在、玉林寺について知る事の出来る資料は以上である。

『郷村史略』によると、玉林寺は最初、鳳凰山麓に開かれたことになる。しかし、中で「大館旧記」に云うように理解すると問題は複雑になる。すなわち「元ハ天鞆小鞆合の辺り、鳳凰山の麓」にあった玉林寺を大永の頃に、此處＝大館市幸町の現在地に移した、となると、現在、当地方に伝わる浅利氏に関する所伝の中で、浅利則頼が比内地方（大館地方）に入ったというもっとも古い年代が永正15年（1518）であって、大永年間の1520年代初頭に鳳凰山麓から現在地に移転したとすると、前述した「十狐村和田」に存在する期間はまったくなくなる。そうすると、浅利則頼の比内に入った年代をもっとさかのぼらせるか、大永の年代をまちがいとするか、十狐村和田にあったという所伝を根拠なしとするか、「此處」をさすのが大館佐竹氏城下の現在地ではないか、という問題につきあたる。中で十狐村和田にあったことに対し、同じ『郷村史略』「独鈷村」の項で天註に「菩提所 玉林寺 稻七百苜米五斗入五十俵 十子和田屋敷 後 大館へ引移ル 浅利分限帳ニアリ 然レバ大館玉林寺ニ記セシ来由と齟齬スルニ非ヤ」と記している。『郷村史略』の筆者あるいは編者あるいは読者の一人が、やはり同じ問題につきあっていることを示している。

この点について少し検討を加えてみよう。

浅利則頼が所伝にいうもっとも古い永正年間に比内地方に入ってきたとしても、入部初期はその足場固めに専念している時期であって、所々の浅利氏関係資料でも、比内地方領有に際しての困難な状況がそここに認められる。そのような中で、本拠地の独鈷の地を離れた大館の地に菩提寺である玉林寺を移転移築することは考えにくい。数少ない資料、所伝からその間のことを推察してみると、則頼の比内領有当初は、鳳凰山麓に玉林寺を建て、やがて比内地方の領有が成り、浅利氏の安定した時代に入って、鳳凰山麓から本拠地である十狐（独鈷）の和田に移築し、のち浅利氏が亡んで大館佐竹氏の時代に入り、大館城を中心に城下町が築構された際、旧浅利氏家臣が大館佐竹氏被官となって大館城下独鈷町に移り住んだころ大館の城下西はずれに移転し、浄心寺、蓮荘寺そしてのちに宗福寺（大館佐竹氏入封時には田町の愛宕社の地にあったという）を加えて、城下西域に寺院域が形成されたと考えてよいのではなかろうか。

秋田市山内松原の補陀寺の閑居、守端禅師についての調査も肝要であろう。

ちなみに、玉林寺の山号「鳳凰山」は、大館市の東方にそびえる鳳凰山にちなむものであろう

が、その命名については、強いて述べるとすると浅利氏が本拠地とした甲斐国青島庄浅利郷（現、山梨県西八代郡豊富村地方）の北西方に、二千m級の鳳凰連山があって、浅利氏が比内入部のところに大館盆地東方にそびえるひときは高い山を鳳凰山（元名不詳）と名づけたことによるのではなかろうか。このことについてはなんら確証、傍証もない。甲斐国における浅利氏と鳳凰山あるいは鳳凰山信仰との関係を調査・検討する要がある。

一方、鳳凰山麓玉林寺跡の北方に発見された城館跡は、いつ構築され、誰が住し、何んと呼ばれていたであろうか。この城館跡に関する直接資料はまったくない。少しそのことについて検討を加えてみよう。

時代は下るが、慶応四年（1868）戊辰戦時には、南部藩と久保田藩の間で激しい戦闘が繰り広げられ、大館地方もその一大戦場となった。久保田藩の北の重鎮、大館佐竹氏は南部藩の侵攻をくい止めるため必至の防戦をおこなったが、その防塁線の一つとなったのが、大館城下の東関門、長木雪沢口の押えであった。その戦闘の様子は諸記に詳しいが、中で長木一の渡一帯の戦闘記の中に「鬼ヶ城山」「鬼ヶ城」の名が頻繁に出てくる。出土の陶丸はこの時のものと考えられる。

また、『郷村史略』『茂内村』の項に、「左馬台と云あり、昔、浅利の家老野呂左馬助野呂左馬助住せし跡といふ」とあり、浅利氏家臣の一人野呂佐馬助が茂内の左馬台に住していたという。左馬台をどのように発音するのは不明であるが、地元小茂内集落では、城館跡を中心とする一の渡から二の渡の間、鳳凰山北麓を「サメエテエ」と呼んでいる。これはまさしく「サマタイ」をさすものであろう。

享保15年（1730）に岡見知愛が編さんした『秋田六郡郡邑記』『茂内村』には、「古来、一ノ関村と云、延宝年中長木沢御境目、南部と御論地之節、一ノ関にては紛敷に付、茂内村と改名、（後略）」とある。

また、文和3年（1354）の『沙弥浄光譲状』には、「比内郡重内郷并有平郷」「山重内田さいけ上ありひら」の地名がみられ、「重内」郷は、現在の茂内地区をさすものであろう。

このようにみえてくると、茂内地区は南北朝期からの大館盆地内の重要地であり、そこは大館盆地から雪沢口そして陸奥国へと連絡する大館口の一ノ関であり、浅利氏時代にはその有力な家臣の一人であった野呂左馬助（亮・介）が左馬台の城館にいて守り、そこは、近世末期まで鬼ヶ城という名で、大館地方の人々に知られていたと見ることはできるのでなかろうか。

城館遺構は、南北に二つの郭を配する連郭式で、便宜上、北側のものをⅠ郭、南側のものをⅡ郭と呼ぶ。Ⅰ郭は東西約120m、南北90m～140mの不整形で、北辺部は3mほど低くなって、その東縁から北縁に土塁がめぐらされ、「土塁柵形」が構えられている。南側のⅡ郭との間には幅30m～35m、深さ5mほどの大きな空堀りを配する。Ⅱ郭は東西約150m南北約60mで、南側には長木川に向って浸蝕下刻した沢が入り天然の濠となっている。西縁直下を南流する長木川と

の比高は20mを計る。

## Ⅵ む す び

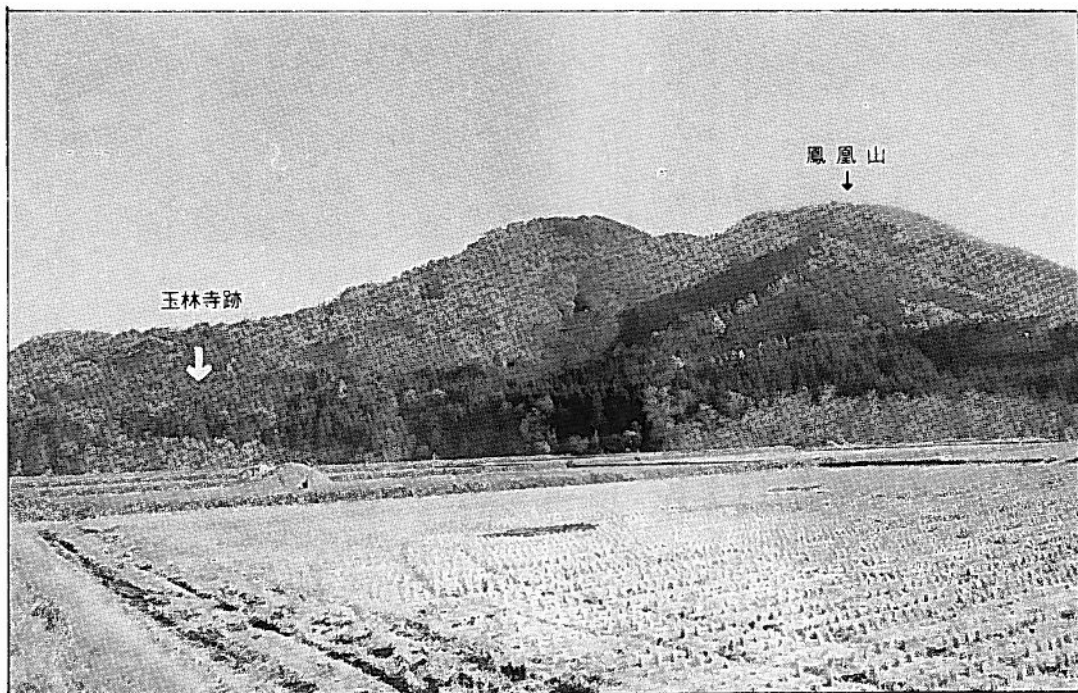
今次の調査によって、その伽藍・建物は確認できなかったが、出土遺物から玉林寺跡の存在がきわめて確実なものとなった。加えて縄文時代中期末葉の集落跡も存在することがわかった。また、これまで謎とされていた鬼ヶ城についてもようやくその手がかりをつかむことができた。

これら遺跡の位置する鬼ヶ台からは西に大館盆地を広く見わたすことができる。発見された竪穴住居跡は、西側20mほどの台地上に構えられた縄文時代中期末葉の集落の、もっとも東側に位置する住居跡であろう。竪穴住居跡内から発見された6個の土器と石皿・台石・石棒・石刀状石製品は、当時の生活の姿そのままが残されたタイムカプセルといてよい。その後、調査地は数千年の間、人々の生活とはかけ離れた土地であった。

やがて、大館地方にも米作りの生活が定着し開発が進むにつれて、『沙弥浄光讓状』にみられるような、大館盆地の中でも重要な「重内」地区として歴史の中に再び登場する。時は南北朝から戦国期の動乱の時代であった。それ以前、鎌倉武士団の一員であった甲斐源氏の浅利氏は、比内の地を拝領するが、その支配力はそれほど強くなかったようだ。この頃、天下道（鎌倉街道）は、茂内地区から獅子ヶ森の東縁をめぐる、商人留を通り山間を抜けて白沢に出、やがて矢立の峠を越えて津軽地方へ結んでいた。義経伝説や時頼廻国伝説が当地にもあって、比較的開けた交通路を往来する人々の語りが聞えてくるようである。

南北朝、戦国期の動乱期に入ると茂内地区は、大館盆地を支配する者にとって重要な関門となった。それは地形的な意味だけではない。豊富な長木沢の杉資源は、当時の労力では日本海へ運び出さざろう得なかった。大館の地そのものが経済的に重要な意味をもつ地になり、大館地方を支配するものにとって長木沢の押えが大きな意味をもつようになってきたのである。長木沢の押え口、一ノ関村に城館が構えられるようになったのも、そのような時代背景があつてのことだろう。玉林寺の鳳凰山麓への建立は、そのような時代の動きとけっして無関係ではあり得ない。

玉林寺の建立が浅利則頼によるものか、則頼時代なのか、現在それを証明する確たるものは無いといわざろう得ない。浅利氏が当地方に果たした役割りにはきわめて大きなものがある。それは戦国武将として、政治的・経済的に果たした面の大なることもあるが、文化的・風土的にも地元の人々に与えたものは大きかったと考える。玉林寺はそのような意味で考えていかなければならないし、浅利氏が当地方にもたらしたであろう熊野信仰や、先にみた鳳凰山の山名などもそのような一つと考えられる。



PL 1 鳳凰山・玉林寺跡遠景



一の渡橋

北郭

南郭

玉林寺跡

PL 2 鬼ヶ城と玉林寺跡近景



◀ 1、杉を伐採した後の調査現場



▶ 2、発掘調査区の杉枝・下草の整理作業



◀ 3、発掘調査準備の整った現場

PL 3 発掘調査前の様子



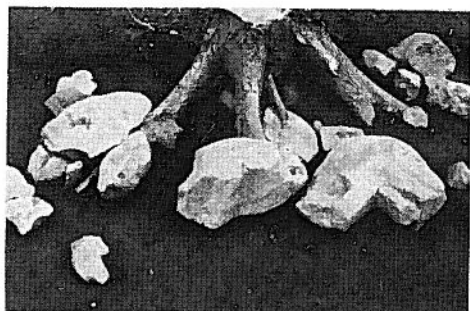
PL 4 C 調査区検出の石列遺構



PL 5 C 調査区検出の石列遺構



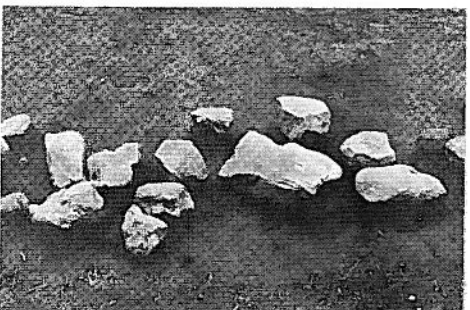
2  
(西ヨリ)



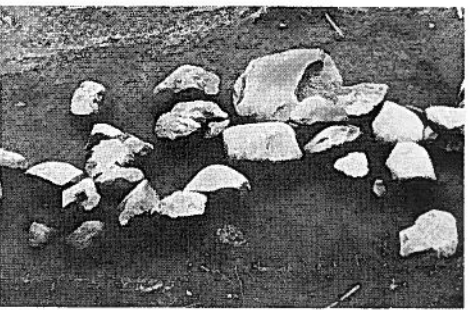
3  
(東ヨリ)



5  
(東ヨリ)



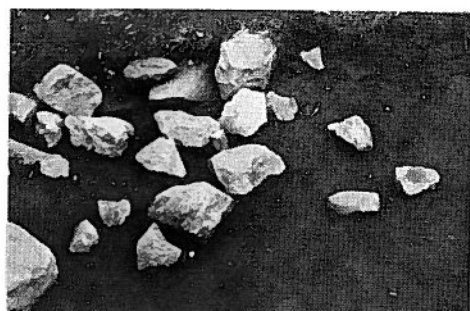
7  
(東ヨリ)



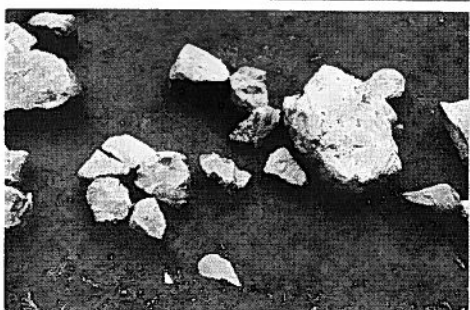
9  
(東ヨリ)



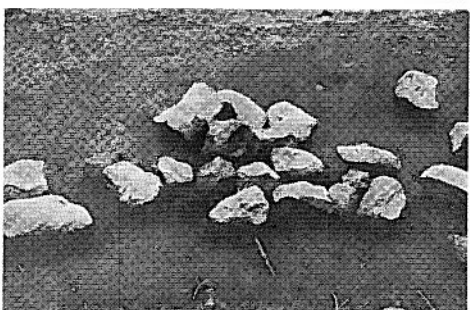
1  
石列最南部 (西ヨリ)



4  
(東ヨリ)



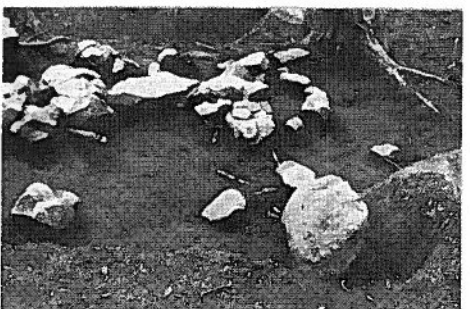
6  
(東ヨリ)



8  
(東ヨリ)



10  
石列最北部 (東ヨリ)



PL 6 石列遺構の細部



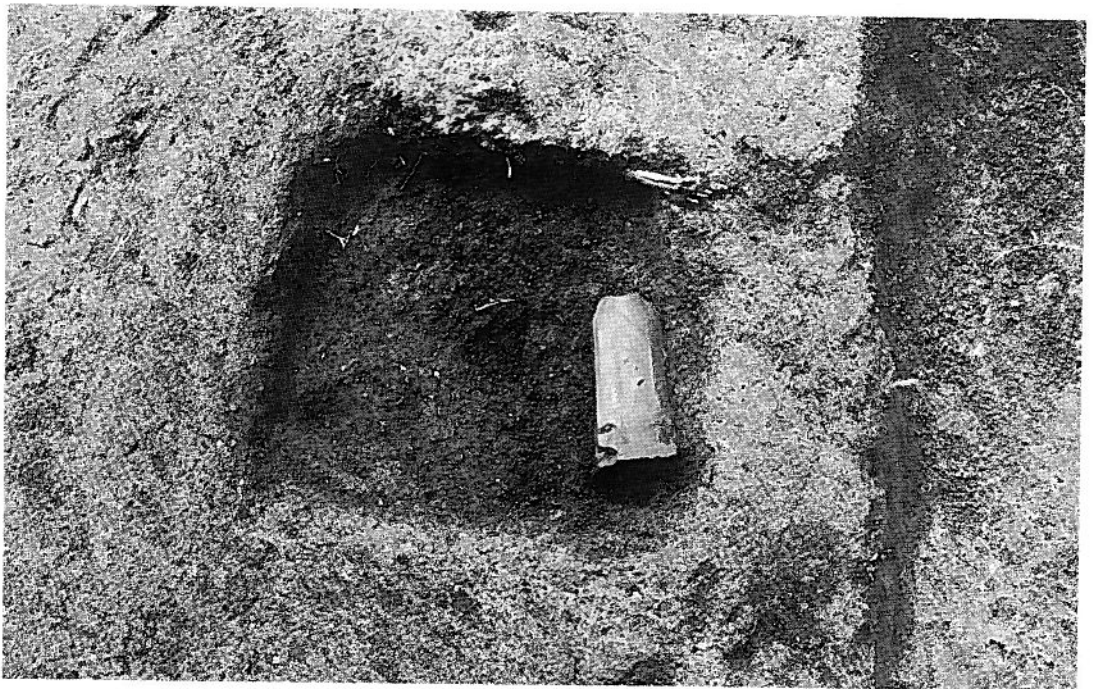
PL 7 石列をとり除いた下位の状況



PL 8 A 調査区東北隅検出の第1号土壇



PL 9 A 調査区第1号土壌の完掘状況



PL 10 A 調査区第1号土壌の北東に検出された方形小ピットとピット内の仏像出土状況



PL 11 B 調査区検出の第3号土壌と立石



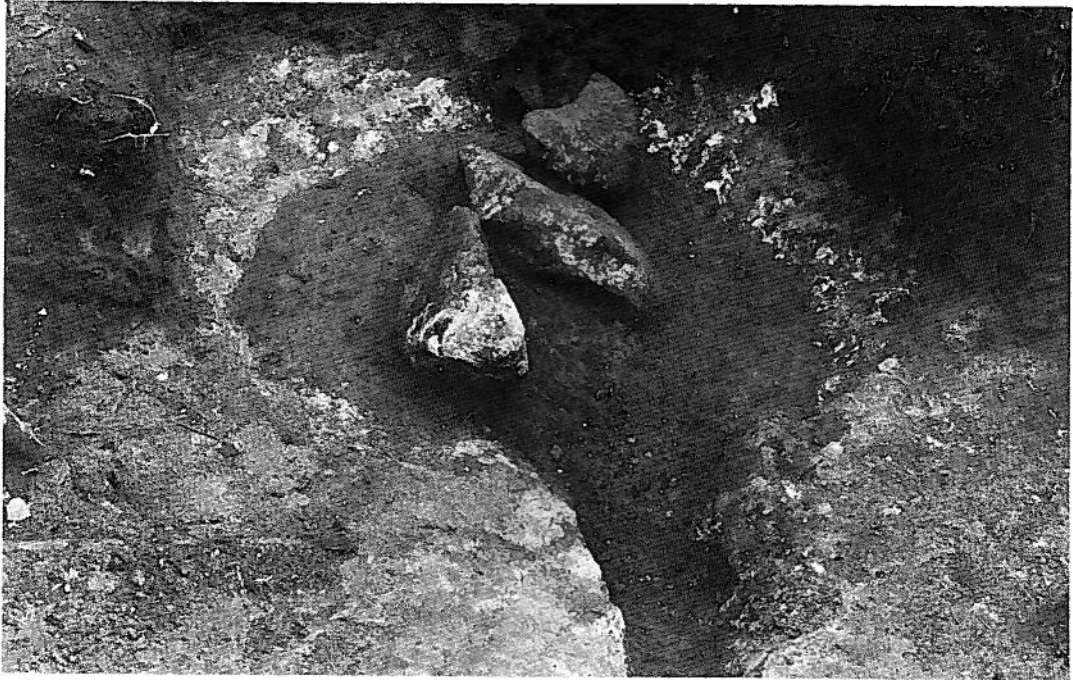
PL 12 第3号土壌と立石埋設状況



PL 13 B 調査区全体写真と出土の石皿



PL 14 B 調査区北東隅の組石遺構



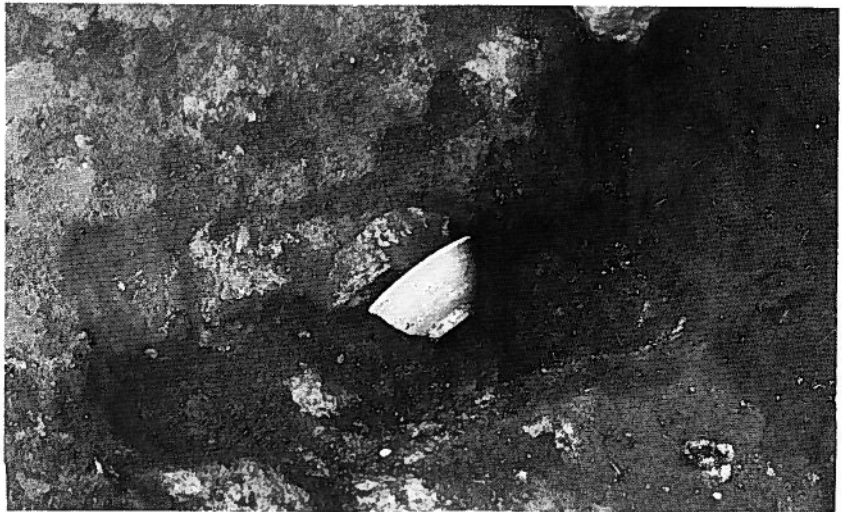
PL 15 B 調査区組石遺構下の溝状ピットと組石土壌



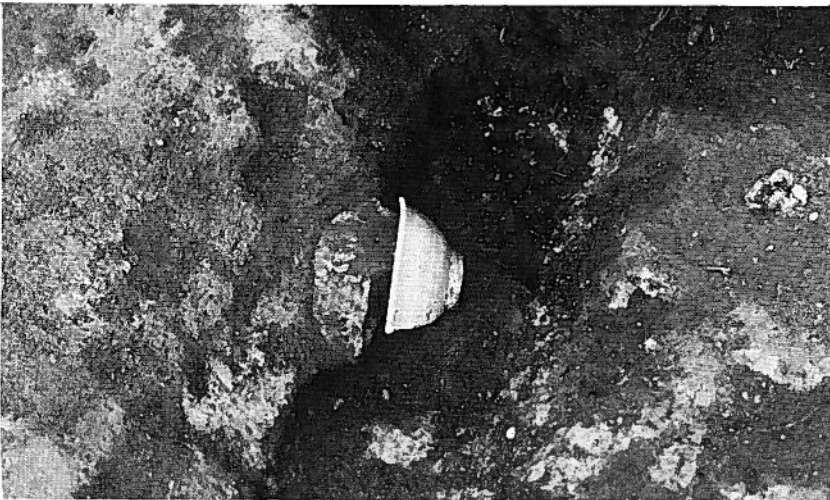
PL 16 B 調査区組石遺構下の組石土壌



◀ 1、溝状ピット内の埴出土状況



▶ 2、溝状ピット内の埴出土状況



◀ 3、溝状ピット内の埴出土状況

PL 17 B 調査区組石下の溝状ピット内出土の埴

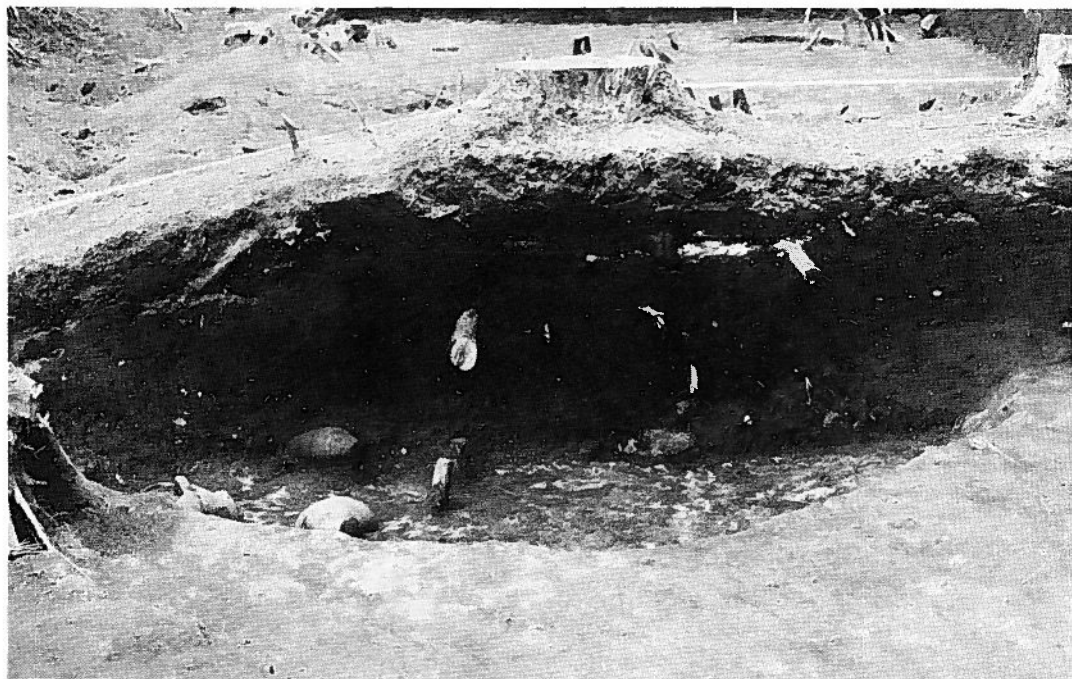


PL 18 豎穴住居跡全体写真



PL 19 豎穴住居跡全体写真

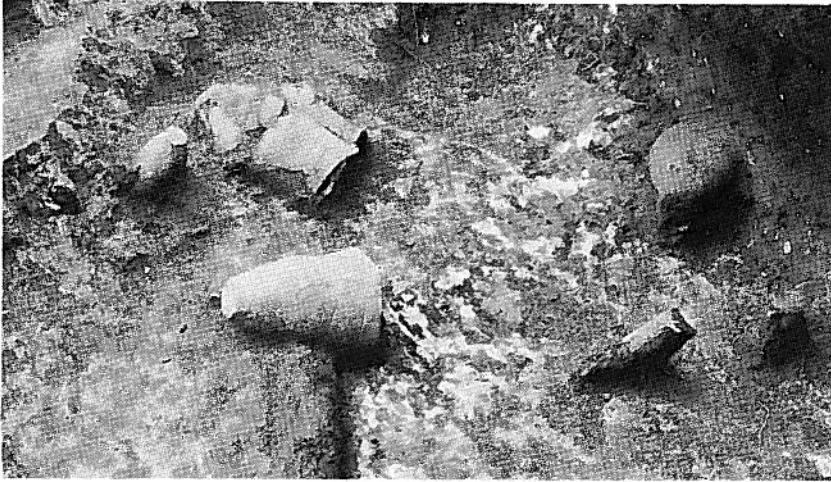




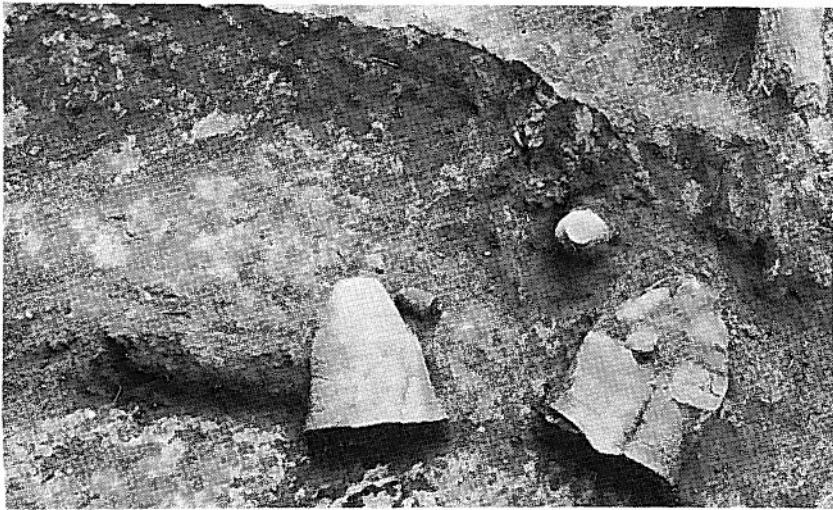
PL 20 A調査区側の竪穴住居跡とA・B調査区間セクションベルト



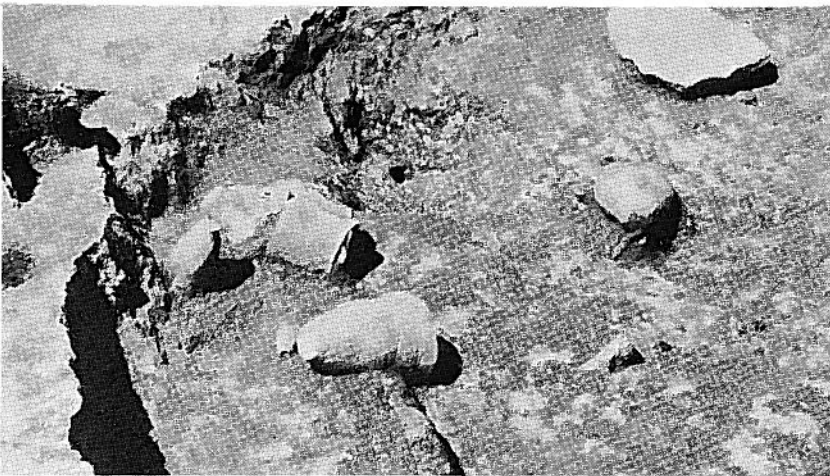
PL 21 竪穴住居跡内の土器出土状況



◀ 1、  
豎穴住居跡内の土器と炭化材の出土状況



▶ 2、  
豎穴住居跡内の土器と炭化材の出土状況

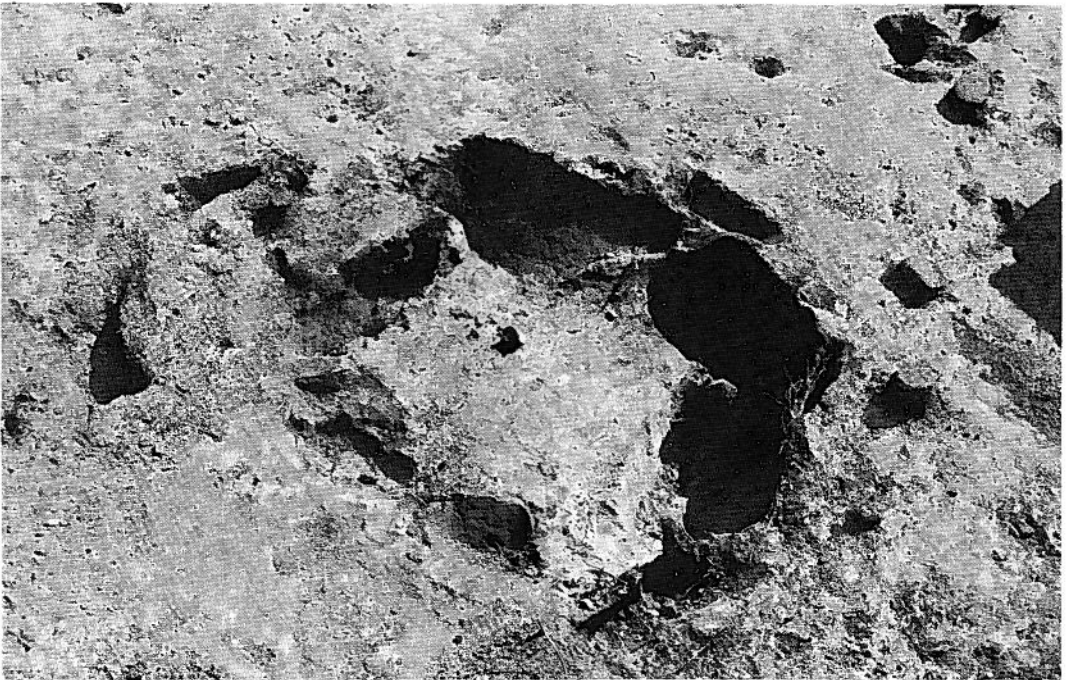


◀ 3、  
豎穴住居内の土器、台石写真真右上方出土状況

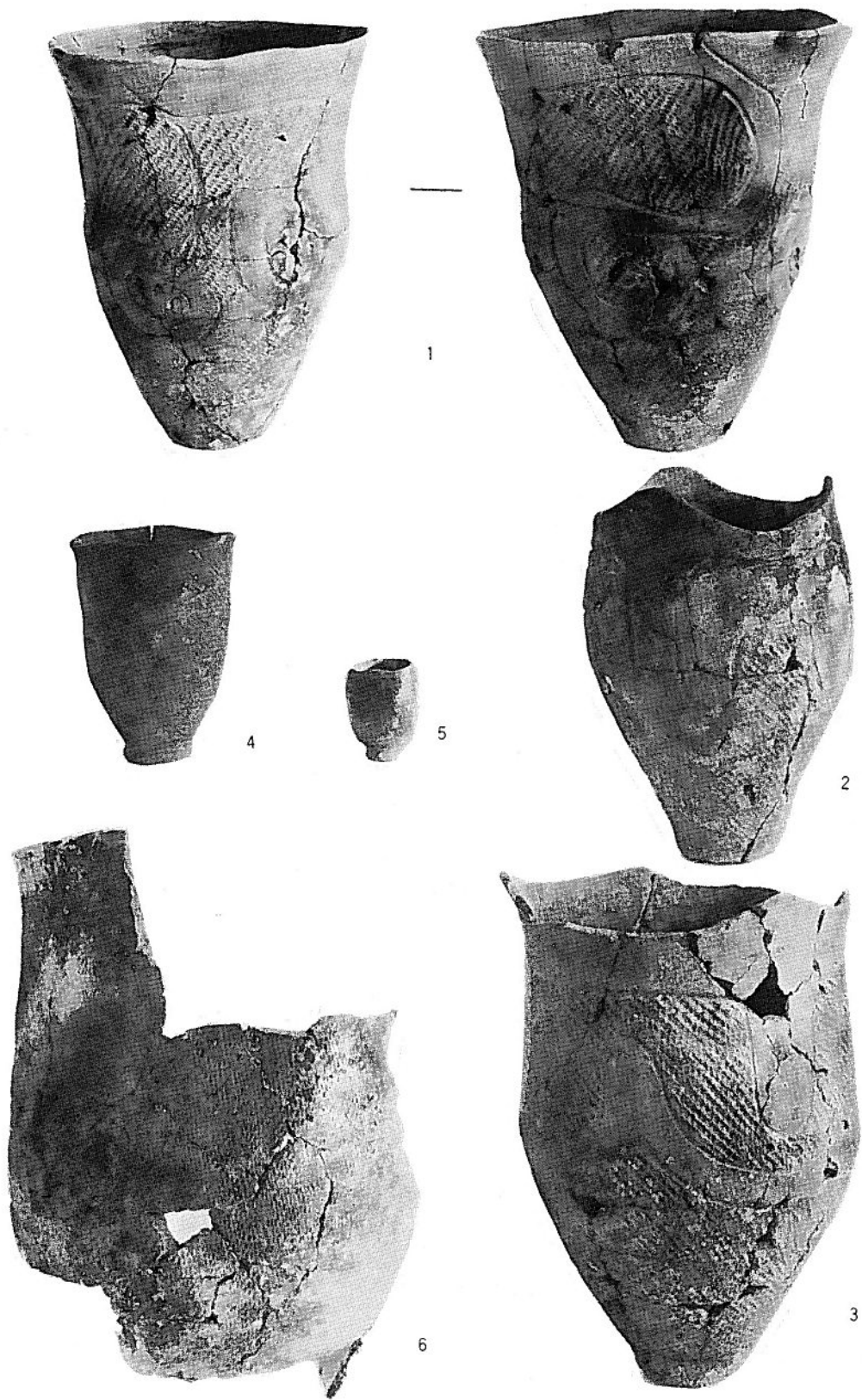
PL 22 豎穴住居跡内南東部の遺物出土状況



PL 23 組石炉と石皿・磨石・石棒・粗製土器出土状況



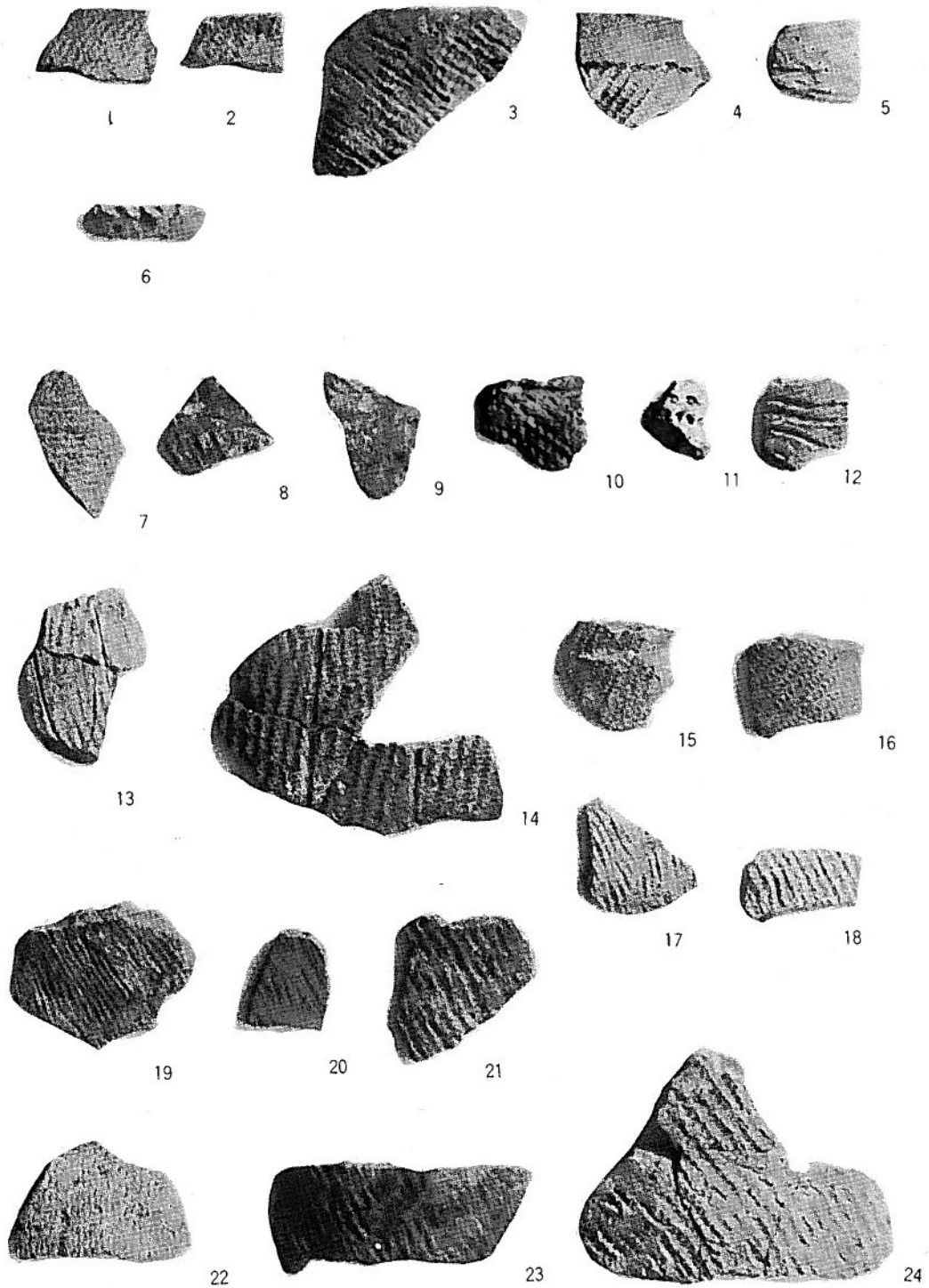
PL 24 組石炉の縁石をとり除いた状況



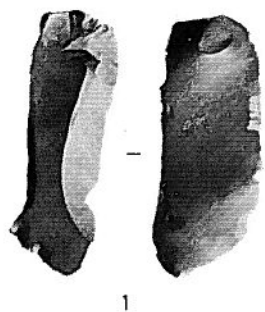
PL 25 豎穴住居跡内出土土器



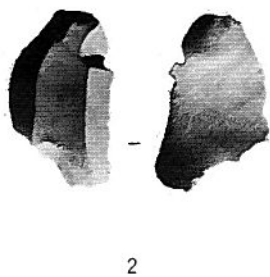
P L 26 竪穴住居跡内出土石器と第3号土壙立石 (7)



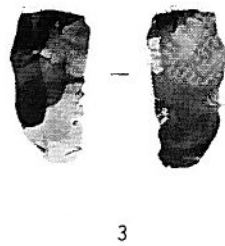
PL 27 玉林寺跡覆土からの出土土器



1



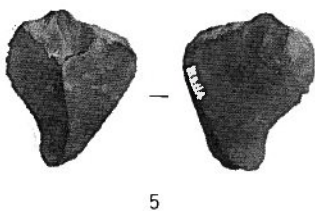
2



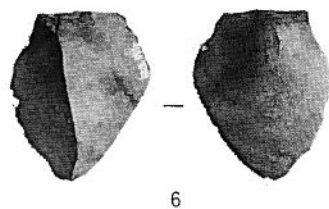
3



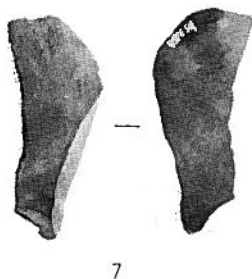
4



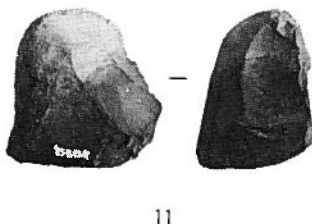
5



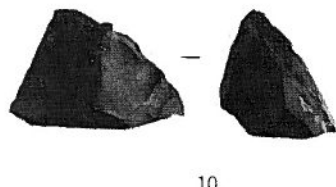
6



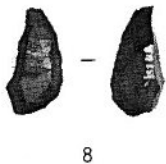
7



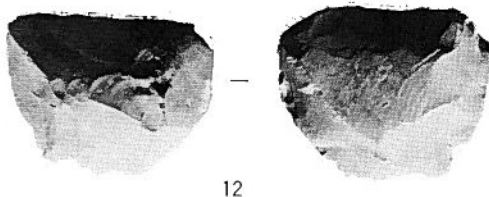
11



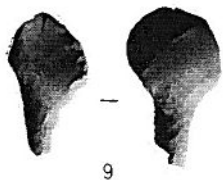
10



8



12

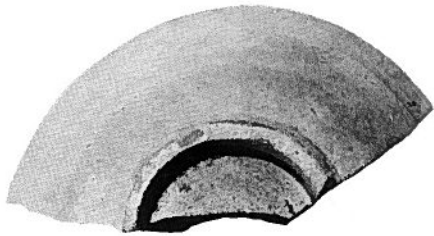
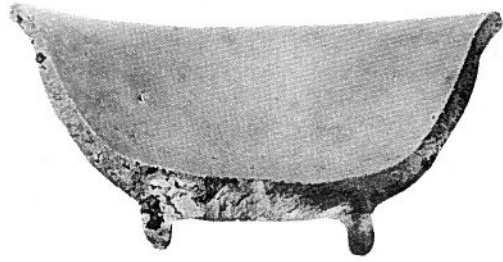
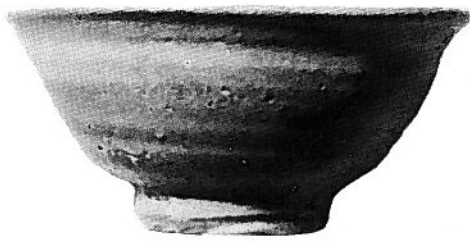


9



13

PL 28 玉林寺跡覆土からの出土石器



組石土壙出土の埴



陶 丸

寛永通寶

仏 像 (地藏菩薩像)



PL 29 玉林寺跡出土の歴史時代遺物





◀ 1、I郭北辺部東側土塁(北ヨリ)



▶ 2、I郭北辺部樹形部(北東ヨリ)



◀ 3、I郭・II郭間の空堀(東ヨリ)

PL 30 鬼ヶ城の主な遺構

---

大館市玉林寺跡発掘調査報告書

1986・1

大館市教育委員会

---

印刷 有限会社大館孔版社

大館市谷地町後 TEL42-1260

---